

島に来た守備隊は北岸一帯に陣地の構築を始めました。作業中の兵隊が上空から発見されたらしく、激しい空襲が始まったのです。

ウツボという少尉が腕に負傷し、アダンバの下に逃げこんだ伊良波さく（当時二十歳）は右足に貫通銃創をうけ不具の体となりました。今、沖縄本島に住んでいますが義足をはめています。

空襲が来たら、何かの下にかくれると教えていたから、私は縁側で、机の下に隣家の女の子とかくれた。急降下して来る飛行機つて、気合よきことにして市内の空襲の上を単独飛ばして、

と守備隊の兵隊は云う。そのうち、今まで何回も受けた空襲の時の音とは違う爆発音と激しい地響きで家はゆれ出し、ただならぬ事と思つてゐるうち、来間島出身の防衛隊の人たちが、「友軍ではなく、敵のカンボーダー穴に行け！」と教えてくれた。家の戸じまいもせず、あわてて逃げた。二、三枚の衣類と預金のあるらしい家はその通帳を大事にもつて自然洞穴の中に二、三軒ずつ、上陸におびえながらひそんでいた。

の不気味な音と共に目に見えて前の空庭園の二重門が折れ倒して、石垣に当つて破裂して赤い火花を散らし石を碎いた。おそろしくなつて早く止まないかと、その女の子とふるえていた。

二十年六月、夕方、畑でわずかばかり残つてゐるも掘りをして、刈りとつたもずる引きずつて畑の溝におろし、暑かつたので相思樹の木陰に休んでそこを出ようとしたとたん、飛行機の爆音がしたかと思うと、爆発音と共に体ごと吹きとばされ、ひっくり返つた。何事かと不安になつて急いで部落へ帰ると、学校北隣りの奥平清光宅にロケット弾がうちこまれている。あれだけ離れていたのに、体ごと吹きとばす力があるとは、信じ難い様な気がした。私だけでなく、ほかに畑にいて爆風でとばされた人がいたと、あとで聞いた。

兵舎になつていた学校近辺に六発のロケット弾がうちこまれていた。艦砲射撃を受けた日、軍艦の群れが部落の東部の海を通つて三つた。宮国東部あたりにぎりと並び、上空で飛行機が一機飛んでいるのが見えた。「あれは友軍だ。心配するな、演習をしている」

七月二十六日。いもを喰べつくしたあと、わずかばかり植えてあつたコーリヤンを収穫し、その幹を切り倒し、薪にするため東へて頭にのせて帰つて来た。家の近くまで来ると普段と様子が違つてゐる。西側の道から吾が家の前まで兵隊が包囲して、通しそうもない。頭上の薪を道ばたに落して、部落の外側を通つて、伯父の家に行つた。畳かつたからその屋敷の東にまわり、ひと休みしようとしてしかけたその瞬間、ものすごい音で何かが爆発した。生徒のものつかバンくらゐの鉄のかげらが口の前に落下して來た。飛行機も飛んでいないし、不思議に思つて道路にとび出ると、部落中の人がワーウーさわいでいる。何事かと思つて家の方へかけて行くと、さつきの兵隊たちがそこら一帯をとりかこんで入れてくれない。吾が家が目の前にあるが家にもはいれない。ふと家の東方を見たら、そこの大きなヤラブの木に肉片が骨ごとくつついでぶら下つている。一体、誰がどうしたのかと、兵隊をつかまえて聞いたたら、この島の人々が吹きとばされたと云う。ひと晩中そこを兵隊は包囲している。その夜のうちに話が広まつて行つた。

三メートル四方の穴を掘って砲を据え、交替でこれを運搬させていたらしい。最初に兵隊が簡単に説明しただけで、実際にはやつて見せすずに出て来たらしい。三人穴に入っていた来間出身の防衛隊員のうち一人は顔色があざめ、ぶるぶるふるえながら穴を出た。中にいた二人がそこでやられたらしいと噂が広まつて、実は、豊式砲とか云うものを作ったので、それを実験すると云つて南の方に向けけて撃ち出したが、それが穴の中で爆発したらしい。最初は守備隊の兵隊にやらせずに、来間出身の防衛隊員にやらせた。

それが事件の真相だったのです。  
あの頃、兵隊と云つたら、ほんとにこわくて、皆が尊敬している  
ものですから、一言の文句も云えなかつたのです。軍隊といふものは  
は信じていだし。

その事件のあった場所は現在の公民館の南、字来間二十四番地の  
南の空地です。山砲隊の実験で死んだ人の名は、砂川芳江さんと、  
高原秀雄さんです。年が若かったせいいか、ガタガタふるえて穴があ  
出て来て命びろいした人は来間栄一さんです。

夫の死

来間島 砂川ヤマ (三十六歳)

石川一之全集

山砲隊

「バーン」と地響きのするものすごい音を聞いた時、私は子供たちと家にいた。驚いて末の子のテルを抱きあげ、家からとび出した。長女が人の群つている方へかけて行つたが、泣いて帰つて来

来間島に山砲隊が一コ小隊、歩兵隊が一コ中隊、工兵隊は陣地設

置のため一時駐屯していた。その兵隊のために漁労班として魚とりをさせられた。石坂という軍曹を班長につけて久松から徵用されて來た人と四人で網を使って追い込み漁をして一日平均五十斤くらい

水揚げがありました。軍曹がついているから自分たちでとった魚を喰う事も出来んのです。東の海で漁をしたのですが、飛行機の来襲があると海中にとびこんでくり舟をはなれ、海にもぐり、息を殺して通りすぎるのを待つのです。今、海面に浮上すると舟ごとやられるとと思うとほんとに必死の思いでした。

その日は、やはり漁に出ていて、豊式砲の爆発事件の事は知りませんでしたが、ハンマーで信管をたたいて発射させる原始的なものであった様です。

島の北岸の断崖の上に擬電（模擬電波探知機）を構築して、そこへ爆弾を投下させて敵にむだ弾を使わせるつもりが、三、四百メートル離れた民家や知に落ちるが多くて、家畜類が数多く死んだ。機銃掃射で家が焼かれ、前里タマ、砂川玄徳、仲宗根良吉、国仲昌孝、福原武一の家などが全焼し、池間正経の家は北側の壁を焼かれた。陣地妨害といって人の住んでる民家を立ちのかせ、来間栄仁、来間栄一、長間盛央、大宜味春市、大嶽文男、砂川輝夫の家は立ちのきさせられ、畑の番小屋や、陣地から離れた親戚の家に身をよせていました。

島の北岸にあつた山砲陣地から、上陸して来る敵を撃つのにじゅまになるといつて強制立のきを命じたのです。

## 空襲

来間島 砂川 輝夫（九歳）

来間六五番地の家を立ちのきされて、親戚の家に家族四人身をよせる事になりました。父は召集兵として八重山へ行ってしまい、当時の食糧事情の事もあって母は食いざかりの子供三人を抱えて大部氣を使っていた。

陣地内立入禁止になつて近づく事もできなかつた吾が家へ戦争が終つて帰つて見ると、サミガシ兵隊たち（疹癬だらけの兵隊たち）は、のみとしらみだらけの家にしてしまつて壁という壁は一枚残らずはがして、すぐには住めないあります。北の陣地からの見通しを良くするためとはいつてはいたが、物干場に使つていた。

空襲で部落内に大型爆弾は落ちなかつたが、ロケット弾や機銃掃射で人が二人負傷したほか、機関銃の弾が馬の鼻を貫通したり、足を折つたり家畜は数多く死んだ。それに加えて兵隊が舟艇で牛を毎日のように運んで行くのを見た。小さい牛は山中にかくして軍の徵発から救つた。

人の被害と乱伐された造林の損害は、最近になつて政府が調査したが、家屋と家畜の損害は調べていない。何らかの方法で補償してもらいたいものだ。

## 防衛隊

来間島 来間栄一（十七歳）

がそれたら一家全滅する所でした。

この豊式とか云う砲はどこへ弾が落ちるか分らん危険なものだとその時から感じていました。

午後三時頃、第二班、高原秀雄、砂川芳江それに私、来間栄一の番が来ました。

昭和十九年、満十七歳で、防衛隊員として動員されました。当時は二十歳で徵兵検査を受けた徴兵適令期の男性は現役兵として召集されて島にはおらず、島に残つた十七歳以上四十歳までの男性三十六名が島に駐屯して来た日本軍守備隊に編入されたのです。女子青年は看護隊員として動員され接收された校舎で応援手当法や担架の扱い方の訓練を受けたほか、一週間交替でクリマガードの東側にある大きな岩影で玄米つきの作業をしていました。

民間の所有している畑に立札を立てて立入禁止にし、兵隊が麦を蒔き、昨日まで自分の畑だった土地が自分で耕作できないのです。それでも國のためと云つて文句を云わさない状態でした。

来間に来た山砲隊が、宮古本島豊部隊で対空砲として作つたいわゆる豊式砲からヒントを得て野戦砲の試作をして、その実験試射したのは昭和二十年七月二十三日です。そのための三人一組の班を四つ編成しました。午前十時頃、第一班、奥平清光、保良春栄、大浦明昭の班が学校南西のアバサバリ近くの穴から撃つたのですが、発射された弾は目標をそれではるかに飛びこえ、西バリに落下したのです。その着弾地点から十五メートル離れた地点には、家を強制立ちのきさせられた私の家族が畑のそばに仮小屋を作つて住んでいました。娘のキクが部落内にしかない井戸まで行つて頭に水桶をのせて運ぶ不便な生活を八か月間も強いられていました。もう少し弾

ると云う西側の民家奥平清吉の家に兵隊たちは集まつて見ていました。ウツボ少尉が「何故出て来る」とどなつていきましたが、そばを離れ

したので、その家までかけて行き、そこへ着くと同時に、「撃て！」と云うウツボ少尉の合図の声がしたかと思うと、耳をつんざく様な爆発音がして、穴のあたりがこっぱみじんに吹きとんで見えなくなつたのです。まい上の黒煙と土煙の中にまつさきにかけよりました。人も砲も影も形もなく、キナ臭い火薬の臭氣と血のにおいがあり一面に立ちこめ私はそこへ座りこんで見ました。ついさっきまで一緒にいた秀雄兄、芳江姉が肉片になつてそこら中散乱していました。

兵隊たちは島に来た当初から耳にたこができるくらい「お前たちの島を守りに来た」と云っていました。

その爆発事件以後、第四班まで予定されていた試射演習は中止されました。

もつと残酷に思つたのは、その二日後の夜です。死んだ高原秀雄さんの裏の道を、兵隊たちが、何事もなかつた様に、大声を張り上げて歌を歌つて行くのです。軍歌でした。

兵隊たちは島に来た当初から耳にたこができるくらい「お前たちの島を守りに来た」と云っていました。

七、島ぐるみ戦争遂行に狩りたてられる

### 伊良部の概況

伊良部村は平良町の西方六キロたらずの海をへだてた伊良部・下地の二つの島からなる人口一万そらの村である。両島の間はわずかに十余メートルていどの水路をはさんで近接しており、一つの島に十数戸の人家がある。

とはいゝ、矢張り命のほそる思いがしたことは改めて言うまでもない。

教室を軍にとられた国民学校は各字で民家を借りたり自然壕をいかして何とか学習の場を確保した。しかし高等科の生徒は青年学校や一般村民と同じようく郡内（宮古島）三つの飛行場建設作業に狩りだされ、また低学年をふくめた児童生徒のすべてが軍馬の草刈り、油脂燃料用のヤラブの実採取等に動員された。米軍の空襲がはげしくなつてもこの作業はつづけられた。空襲をさけて未明に起きて草を刈り軍の要求にこたえたのである。昭和二十年に入つてからは初等科五年以上の児童および高等科生はさらに、米軍の上陸にそなえて海岸の防るい作業にかりだてられた。とても学習をつづけられる状況ではなかつた。

海空の補給路を断られた軍は、食糧確保のため北の佐良浜では漁撈班を組織して魚介類を、南の五カ字では部落長を通じてサツマ芋、芋ヅル、野菜、味噌、醤油、塩にいたるまで供出を強制した。牛や豚、馬は全村にわたつて強制的に買いあげている。連日の空襲下、防空演習、竹ヤリ訓練、陣地構築、防るい作業等にかりだされ、そのあいまに手がける農作業では、民間の食糧事情も日を追つて窮屈していくのは当然のことであった。それでも軍は、供出の遅れや低下等が食糧事情の悪化からきたものとはみなかつたようだ。あらうことか軍への非協力としてとられ、部落役員を旅團本部によんで威圧し、かわつて村民の信望あつた教師を部落長に直接任命したりして、食糧の供出を強制しつづけたのである。軍は「教育もだいじだが、戦力を増強するためには兵隊に食べさせなければならぬ」といつてもいいほど。しかし南に位置する下地島は無人に近く、村民のすべては伊良部島七字に居住している。字の位置は島の北部に池間添、前里添の両字が小さな坂道をはさんで並び、佐良浜と総称する。なりわいは主として漁業である。およそ數キロへだてた南部の五カ字は西から佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部と珠数状につづき、対岸の下地島にそれぞれ橋がかかる。村民のなりわいは主として農業。北と南の人口はほぼひとしく村を二分したかたになつていて、村役場は南の中心地國仲字に位置し、国民学校は佐良浜と国仲におかれている。

このわずかに三八平方キロの小さな伊良部村全域に軍が展開したのは昭和十九年九月中旬。警察の指導で各戸ごとに防空壕を掘り、台湾への強制疎開がすすめられた直後のことである。独立混成第五十九旅團（碧部隊）およそ三六〇〇人、山砲隊二〇〇人。大本營の作戦命令で「満洲」から移つてきた碧部隊は伊良部国民学校を接收して旅團司令部をおき、周辺部落に野営をはじめるとともに、背後の森林、原野一帯に巨大な陣地構築をはじめた。また山砲隊は、米軍の上陸地点として平良町大浦方面を想定、そこへ向け牧山附近に山砲陣地のトンネル掘りを始める。伊良部村への軍用資材はすべて対岸の平良港から佐良浜の船着場に陸上げされた。船着場から軍用自動車の通る本道までの数百メートルにおよぶ狭く右ころだらけの部落内の急坂での運搬作業は、ほとんど佐良浜の女子青年があつた。弾薬箱から食糧、資材等を坂の上で待機するトラックまで、婦人が頭上にのせて運びあげたのである。舗装されない急坂で弾薬箱を頭にのせて運ぶことは、如何に日ごろ足腰をきたえた漁村の婦人などつたりする。

碧部隊の主力は米軍の宮古島奇襲上陸の公算が濃くなつたことから昭和二十年六月はじめに平良町添道方面に移動、宮古島北地区の防衛任務についた。しかしそれ以後も食糧不足を補うためにバッタ、アダンの実、野草採取等が児童生徒に強制されている。

伊良部村も他の町村と同様に昭和十九年秋から二十年夏にかけて連日のように米軍の空襲にさらされた。北も南も部落の中心地は爆撃をうけ、あるいは焼夷弾で多くの民家が焼けた。しかしながら伊良部の軍はまったくと言つていいほど反撃をしていない。あれほど一般兵士はもとより村民をかりたてて陣地をつくり、海岸線に防るいを築き、あるいはなげなしの食糧まで強制供出させた軍がかんじんの戦闘において、米軍機を迎撃しなかつたと村民の証言は一致して指摘している。一説には、迎撃することで味方の陣地の所在を知られることをおそれたのだろうという。彼我の裝備の差があまりにははだしく、迎え撃つ状況ではなかつたのだろうか。

戦後、軍の復員にさいして伊良部村の人たちは、国民学校はもとより村をあげて合同演芸会を催して労をねぎらい、送りだしているのである。一年前、盛大な歓迎演芸会をもようしたようだ。

## 部落会長

伊良部村字佐和田 大川 恵良（三十七歳）

### 率先して家族を台湾へ疎開させる

伊良部村では昭和十九年七月ごろであったと思うが、警察の指導で防空壕を掘りました。伊良部国民学校は校舎にそつて掘りました。あわせて校舎を擬装するために高等科の生徒が網をない、すべての建物にかけるとともにアダンの木を切ってきて全面的に擬装しました。敵に知られないようにというとなので、窓もみんなおおわれてしまい、屋でも暗く授業もさしつかえるほどでした。そのつぎに来たのは疎開の命令です。強制疎開で、役場がいくら勧誘しても希望者がいないので、教員の家族から率先してやることが話しあわれ、ぼくと島尻実昌さんが率先して送りだすことにしました。そうすると親戚や近所の人も希望するようになり、南の五か字からは百世帶あまり台灣に疎開したと思います。うちの内たちが出発したのは九月二～三日ごろだった。妊娠八ヶ月の家内と女学校一年の長女をかしらに長男二男、三男の五人。一升ビンに入れた飲み水や砂糖キビなども持っていたが、空きビンやキビがらを海に捨てたら敵の潜水艦にねらわれるからといって、それはもうきびしいものでした。

学校は旅団本部にとられる

九月の中ごろだったと思います。「満洲」から一個旅団の軍が入

んでいました。

そのうち御真影は野原越の壕にうつされ、交替で宿直警護にあたりました。学校ごとに割りあてがって、伊良部校は隣校の佐良浜校とくんでそれぞれ二人ずつたたようになります。十一月ごろから通ったと思うが、ぼくは三回ぐらいやった記憶があります。敵機の攻撃をさけて、屋は平良（現とみや会館の下）と伊良部の往来はまたくなかったが、夜はひつきりなしに軍の舟艇が通っていましたように思います。それに便乗させてもらいました。真ツ暗やみなかを平良のかすかな明りをたよりにすすむのです。宮古本島内の学校は朝から夕方、夕方から朝までというふうに交替していたが、ぼくらは離島でよちよちうこれないので、夜行つて翌日の夕方交替して夜帰れる、一昼夜の当番でした。食事は近くの部落のフサンミや花切あたりからサツマ芋や餅を売りにきてくれたので大いにたすかったです。洞窟のなかには小さなお富をつくつて、そこになかを平良のかすかな明りをたよりにすすむのです。宮古本島内に小さな広場があつて石粉をきれいに敷きつめ、そこにむしろを敷いて寝ました。とても寒いものだから、一晩中タキ火をたいていました。

軍命で部落会長になり供出、作業を指示

はじめのころ兵隊たちは伊良部の人を野蛮人ぐらいにみていました。子どもは普通語もできないと非常に馬鹿にしていました。ぼくらのような教師は本土から来たものだと思っていました。これではいかんというので学芸会を催して認識をあらたにさせたこ

つてきました。混成旅団で四〇〇〇人くらいいたと思います。それに山砲隊一個大隊二〇〇人で、長山を中心に入ってきた。敵が上陸てくるのは宮古島の大浦湾あたりと想定して、牧山にトンネルを掘り、砲身の大きさだけ、大浦湾に向けて砲台がきずかれました。およそ八〇〇メートルのトンネル掘りに村民も毎日のように狩りだされたのです。何しろ岩盤で、トラバーチンだから大変でした。兵隊は夏休みの終りごろから少しずつ入っていたと思います。九十月に混成旅団が入り、学校も接收されました。本部はのちに国仲部落の北方俗称ウルカの自然壕を中心にもぶきの家をつくつてうつり旅団長もそこにいました。空襲がはげしくなってからは学校や部落内にいた軍はみんなウルカ一帯の森にうつり、さらに部落の東側の御獄のあたりに軍用の防空壕掘りがはじまりました。そのとき軍は校舎の床をはずし根太をとり雨戸をはぎとつて防空壕に使いました。壕は大人が立つて歩けるほど大きなものでしたね。学校は軍が接收したあとは使えなくなつたために校舎を三つにわけて授業をつづけることにしました。このころ校長（本永透）は台湾に疎開した家族を見舞いに行つて帰つてこす、東（伊良部・仲地）は私が主任になり、中央（国仲）は御真影を奉護するためには教頭の下地恵義さん。西（佐和田・長浜）は島尻実永さんが主任になつて分担しました。東区では、伊良部部落の石粉をとつた大きな横穴を避難壕にして、その西側の広場を体育の時間に利用したものです。初等科の一年生から高等科までを一か所に集めて強制しました。防空壕に黒板をもちこんでの授業でしたが、体育は広場でやるので空襲警報を知らせるサインレンがなると急いで防空壕にかけこ

ともあります。  
あるとき旅団本部をたずねたところ、伊良部の部落会長が着剣した副官につるしあげられていました。師範学校を出た岩手県出身の副官であったが、なぜ軍に供出しないかと言つて、それはひどいものでした。軍は食糧の補給ができないものだから、部落に何でも強制して供出させていた。サツマ芋、野菜、味噌、芋ヅル、あとは馬まで供出させて食べていました。しかし、そのうち空襲ははげしくなつて畠仕事も思うにまかせない。民間もあるものを食べるしかない。はじめのうちこそ軍も「勝つんだから…」と言つていたが、そろそろ敵の上陸のうわさえ流れてくる。このさきどうなるかわからぬ。そんな状況だから軍への供出もはかばかしくはない。そこで部落会長を旅団本部に呼びつけてつるしあげたのだと思います。あとはぼくと島尻実永さんの二人が旅団長によばれ、「教育も大事だが、戦力を増強するためには兵隊に食べさせなければならない。このままでは敵がくるまえに兵隊は死んでしまう。すまないが部落会長をやって軍に協力してくれ」と、旅団長からじきじきに頼まれました。このころまだ学校は講堂の一部だけは残つていて御真影も安置されており、旅団本部もそこにありました。ぼくら二人は考えた。兵隊がみんな死んで、村民だけが生き残つても仕方がない、死なばもるともだ、と。それでぼくが佐和田、実永さんが長浜の部落会長になって軍への供出を督励することになりました。ぼくは引き受けた以上、何とかやらなきゃいかんと思って、佐和田部落に三つの分会があるので分会に一人ずつ分会長をおき、その下に班長を何名かおいて食糧の供出に力を入れることにしました。軍も

民もみんな一緒に生きていかなければならんんだからといって何でも供出してもらいました。サツマ芋、芋ヅルはじめ、味噌も戸内に一斤、二斤と割りあてて出させました。しかし味噌も底をついてしまい、今度は軍は製塩所に圧力をかけてきました。塩だけは朝早く潮水をまきちらして昼太陽にぼし、夕方塩分の濃くなつた砂を集めさせてさらに潮水で流して炊くわけだから、夜でもできる。それも強制して供出させました。非協力的だといって、佐和田の仲地さん親子が軍に殴られたこともあります。

そこに集めておけと命令がくる。星はあぶないから未明か、夕方に生徒を引率して草を刈り指定の場所においておくと兵隊がとつていなくなる。しかし空襲はますますはげしくなり未明にもしよつちゅう敵機が襲ってくるようになると、もう草刈りどころではない。万一子どもに犠牲でも出たらもう取り返しがつかないといって、あとにはことわったこともあります。

軍命で防空壕掘りもしました。佐和田は長い壕を四つ掘ったが、敵が上陸して最後だという場合は村民残らず旅团本部を中心に集結しなきやならんというので国仲よりのところに掘りました。しかし一方では敵は佐和田の浜から上陸するといって、各所に散在する大岩の一つひとつに誰れだけがひそんで、敵戦車がきたら手榴弾をもって突つこむということを決めてありました。

に真中に爆弾が落ちて、北側の校舎は真二つに切れてしまいまし  
た。学校では三人死んだが、東区では防空壕に直撃弾をうけ子ども  
二人をふくむ一家が全滅しました。馬などもあちこちで弾にあたっ  
て死んでいます。ほくの家にはさいわい誰れもいなかつたが、機銃  
が十四発もあたつっていました。

片隅に防空壕を掘つて避難しておいた沿革史はじめ学籍簿など学校の重要な書類がみな水浸しになってしましました。それで朝早くから職員みんなで運動場に干している最中に艦砲射撃が始まったのです。ぼくは部落会長もしているから急いで佐和田部落にとび、さあ艦砲射撃のつぎは敵の上陸が始まるとから退避の準備をやれ、軍の命令が来たら司令部近くの防空壕に入れとふれ歩きました。帰りに旅团本部に寄つたらイギリスの軍艦だということでした。腹痛を起していって國仲の民家で外便所をかり用をたしていたら、友軍機が五十余機どうどうと飛んで行く。あのときはほんとに頼もしかつた。翌日学校へ行つたら黒板に敵軍艦一七隻を擊沈したと書いてありました。大本営発表として台湾沖でたたかつた友軍機は五七機全滅したが、我が方も相當やられていることだし大戦果だと信じていました。

卒業式は三月にやりました。もう学校は使えないから伊良部部落の浜の近くで仲兼久という人の大きな養蚕室でやりました。戦争で養蚕ができず空屋になっていたのを利用したのです。その翌日進級祝いとかいって職員数人がある父兄の家によばれました。その席へ仲地部落の西側にあつた衛生本部の軍医が酔つて入ってきて、いきなり女教師を強姦しようとしました。まつ脣間、みんなの見ている前でした。ぼくが止めに入つたら、ぼくにまでくつてかかってきました。昼の三時ごろだったと思います。「自分は軍医大尉だ」と名乗つてはいました。敵の上陸も近いのでやけくそになつていたのかもしれんが、けしからん男でした。

また、そのころは伊良部の白鳥とか、佐良浜の西あたりでよく信

また、そのころは伊良部の白鳥とか、佐良浜の西あたりでよく信母弾があがるといって、村内にスペイがいると軍は言つていました。午前三時ごろ、みんなたまき起こされ、佐和田・長浜は長浜森の広場に集結せよとの命令がきました。伊良部や仲地、国仲も同様の命令が出ていました。午前六時までに集まれと。そして、村民のなかにスペイがいるという。「信母弾があがるたびに翌日は間違いなく伊良部島が空襲されている。スペイがこの島に軍がいることを

の石垣の防壁を築いたことです。何でも南大東島と同じくもやってきたとかいう大佐か中佐の提唱ではじめられたようで、伊良部村の七つの字に地域を割りあててきました。佐和田部落は下地島の西からずっと白鳥までがわりあてられ、仕方がないから部落に相談してさらに分会ごとにわりあてて作業に動員しました。石垣を高さ八尺、下の巾が一間半、三角錐みたいなかたちでおよそ二キロメートルにわたって石垣を築くことになりました。それで畠のまわりの石垣はじめあちこちから石を集めてきて積みあげました。昭和二十年四月ごろではなかつたろうか。もつとも空襲のはげしいころでした。ある日のこと、ぼくは佐和田のフツ浜といふところで作業しているとき空襲です。ちょうど伊良部の島の西側を飛んでいたからこちらは大丈夫だなと思っていたら、急に方向転換して機銃掃射をはじめたのです。みんな隠れると叫んで近くにあるタコツボ壕に避難したが、さいわい作業隊には負傷者はでませんでした。しかし部落には焼夷弾を落していくために佐和田、長浜、国仲、伊良部、仲間以上は経過していくように思います。毎日各戸から一人、二百数十人の男女が手弁当でやつてきて、二キロのうち五〇〇メートルまで来ていました。佐和田の附近はさいわい石の多いところで他の部落の分よりわりあい早くすんぐでいたように思います。

そのときの空襲で四十八軒が焼けたようにおぼえています。ぼくの本家では茅ぶきの方に火がつきました。さいわい兵隊がいて茅をみんなはずして大事にいたらなかつた。母は防空壕に入っていたが、防空壕にも七発の機銃があたっていました。学校は焼けないかわり

敵に知らせているから空襲されるのだ」と、中隊長で大尉がものすごい剣幕でいうのです。敵の空襲までが村民のせいみたいに言うのには腹が立つたものです。

ぼくの家は家族もいなかつたので四部屋あるうち二部屋を兵隊に貸していました。田中という大尉を隊長に中尉、下士官二人、兵卒二人の六人がいました。それで時々夜になると誰れかしらないがよく石を投げられました。塩の供出を協力的でないといって仲地さん

親子がめちやくちやに殴られたりしたから、仕返しに石を投げたと思います。誰のが投げるのかつかまつたが、部落の人であることだけは間違いないと思います。村民もあとは焼けくそになつていたようです。敵が沖縄に上陸するし、つきはここだということです。それに食糧はないし、どんなに軍が強制しても自分が食べるのもようやくの状態だったのですから。

学校の授業の方は三月ごろまでは何とか三か所でやりました。しかし四月からはむづかしくなり、あとは部落ごとに、隣組で二十名ていどずつでやるようになりましたが、これもほんのわずかな間で、やめてしましました。このころには野原越のク御真影ク当番も伊良部からはやめていたように思います。軍も民も栄養失調でどうにもならない状況下で敗戦をむかえました。

敗戦をきいたのは八月十五日の夜八時ごろだったと思います。

田中大尉らが兵卒をのぞく四人で酒をのんで終戦のはなしをしていました。そのうち隣室にいたぼくをもさそい「終戦の詔勅が出ました」というはなしをしました。かれらは終戦になったことをよろこんでいるようにみえましたね。

ればいいといふ。自分で牛や豚をさがしてまわるんではいけばやつてもいいと言つて引きうけることにしました。徴発係といふより、いわば命令をつたえる係です。

買いあげ値段については軍が直接交渉しているようだ、私は値段

の交渉や支払いについては何も関係しないで、ただきようはあんたの牛を軍に出す日だから持つてきなさいと言つて来ました。私がこんな係をさせられたのは、日ごろ私を可愛がつてくれていた役場の岸本という人の推せんだということがわかつたが、軍は博労にもうけさせるよりは軍の命令を忠実に守つてくれる一般の人間に協力させようとしたと思います。

役場から大きな固い紙に書いた牛の持主の名簿がわたされていて、軍の指示通り、大体一週間に一回ぐらい村内を命令して歩いたのです。持つていくところは国仲橋の入口のところで、持ち主がそこまでつれできました。つぶすのは私が毎日四人の夫夫を頼んでつぶさせました。つぶし質としてはお金を払わず、牛の骨をあげました。私が命令して歩くときからつぶすまでの間、兵隊一人が見張りのようにしてついていました。そのうち牛がいなくなつたので、今度は豚を出すように命令して歩きました。この方は牛より間があつて大体月に二回くらい、全体で二十頭くらいつぶしたように思います。豚は国仲橋でなく、直接部隊へ運ばして、そこでつぶしましました。牛も豚も繁殖用だったためにどこ家の家でも手離すのを内心いやがつていました。軍命だから仕方なく出したのです。牛は主として北部（佐良浜）、豚は南部（五か字）から出していました。また、軍命とはいえ直接命令を伝えているのは私だから、ずいぶんうらま

九月下旬に佐良浜の漁船で、台湾に疎開した妻子をむかえに行きました。およそ一ヶ月かかつてつれて帰つたが、つくづく同じ苦勞するなら疎開などさせずともよかつたのにと思いました。

### 食糧供給の軍命伝達係

伊良部村字国仲 粟 国 良 敦 （三十四歳）

#### 軍用肉供出の伝達係になる

伊良部に軍が入つてしばらくしたら計理部の曹長が呼んでいました。この本部（旅団本部）に行つたら、牛の徴発係をやらと言われました。あのころ伊良部には牛や馬を扱う博労が二三人はいました。私はそのころは農業のかたわら家で小さな雑貨商をしていたが、博労の知識は全然ない。それなのにそこには博労も一人きていましたのに、その人は命じないで私にやれといふのです。それで私は畜産の面には何にもわからないから、この人が専門だから人を任命せしらよい」と言いました。その博労の人が軍に牛を入れて「軍に反対するか」と、まるで脅迫でした。それで私は軍に反対することはできない、「軍に反対できなければ命令通りやれ」と剣をもつて脅していふのに、ことわることはできないと思つて、何にもわからんにどんなことをするのかと聞いてみました。そうしたら、「どことこに牛や豚がいるということは役場に名簿があるから、ただ指示にしたがつて何月何日に牛を車に出せ」と命令さえす

れていたのではないかと思ひます。豚の徴発は終戦までつづいたようにおぼえています。

#### 野菜等の運搬係もかねる

私は馬と馬車をもつていたので、牛の徴発に行かないときは毎日馬車をもつて部隊にこいといわれ、仕方がないからふだんは馬車を引いて部隊に通い運搬係もしました。運搬は各部落が軍の命令で供出するサツマ芋や野菜類を受領して歩くのです。部落ごとに集めてあるのでこれを運ぶのです。そのころ軍は国仲森（現在の伊良部中学校後方）のところの美里嶺を中心に横穴式の防空壕を掘つてそこへ運びました。徴発係に任命されたときはまだ軍の本部は国民学校にあって、そこには一回か二回はこび、十日かそこらで本部は美里嶺の防空壕にうつたと思ひます。芋や野菜の受領も牛の場合と同じで、私はたゞこぶだけでした。お金は全然扱わなかつた。しかしいつも命令に行くにも受領に行くにも上等兵が伍長が一人必ずついていたので、計理はあるいはその人がやつていたのかも知れません。ただついているだけで何ひとつ運びかせいや積みかせいをするわけではありませんでした。野菜は時期もので何でも運びました。大根、白菜、芋ヅル、とにかく集めてあるものは片づけから軍に運んだのです。

部落の人たちは自分たちも食べるものに困つてゐるのに軍の命令だつて供出していたが、半年くらいしたらもう部落から何も運ぶものはなくなつていました。供出をしないといふより供出するものがなかつたのです。ちょうど空襲がはげしくなつたころだから、昭

和二十年の三、四月ごろまでだったかもしれません。時には真夜中に部落から部隊まで飲料水をはこんだりしました。あつちこつちの部隊にはこんだが、国仲と佐良浜のちょうど真中あたりにコロコ散

というところにいる部隊にもはこびました。水運搬はいつも夜中の十二時過ぎからで、部落の井戸からドラム缶三本にくんで馬車に積んではこびました。水はこびのたびに空襲があつて少しも前に進まず、二、三キロの道のりを二時間ばかりではこんだりしたものです。

時には佐良浜の船着場の納屋からザラメをはこんだが、このときも夜中だけでした。軍は食糧はないと言ひながらザラメだけはたくさんありました。しかし民間には配給してくれませんでした。ザラメはこびのときは野菜受領のときと同じで、たいてい伊藤といふ上等兵がつきそっていました。いつも一緒に仲よくなつて、

そんなにうるさいことは言いませんでした。しかし水運搬のときだけは命令だけしてついてこないために、真夜中いつも一人で難儀しました。

軍に使われてすっかりなれたころ、家の附近がアメリカの空襲で焼けました。軍にはいつもあさの十時前に行っていたが、この日も馬車に馬をかけて出発しようとしたとき突然敵の空襲がありました。いきなり機銃が落ちはじめたのでびっくりして馬車も馬もほうりだして石垣の下に逃げ隠れしました。ちょうどわたしの家の西の道からそのさきの四辻まで十軒くらい焼けました。一軒の家が燃えはじめてあとはまたたく間にみんな燃えてしましました。このときの空襲では国仲だけでなく、南の五か字全部が部落の中心に焼夷弾

が落ちて燃えてしましました。

#### お礼に松の丸太と荷車もらう

空襲のはじまつたころ国仲部落はじめ五つの部落の男の人はみんな下地島に動員されて竹ヤリ訓練をうけました。よっぽどの年よりでない限り男はみんな狩りだされ、下地島の山の中で訓練をうけたが、国仲の指揮をしていたのは曹長でした。みんな弁当持参で通いました。そこでは竹ヤリ訓練のほか防空演習のようなこともしていました。竹ヤリは米軍が上陸してきたとき体当たりして殺すために訓練するのだと言つていました。

私は軍に使われていたためか、この日一日だけで翌日からは訓練に行かずすんだが、ほかの人たちは何か月も弁当をもつて通っていました。

ところがちょうど私が訓練を行つた日にも伊良部には大空襲があつて、あつちこつち家が焼けました。空襲のあいまをぬつて村役場の助役が訓練しているところに来て、「君の馬も弾にあたつて死んでしまつたよ」と教えてくれました。訓練を終つて家に帰つてみると、死んだ馬は軍がもつて行つてしまい骨だけを返してきました。お金もいくらかもらつたように思つがいくらだつたかおぼえていません。それに軍は死んだ馬のかわりだといって二歳馬をくれました。私の馬は十何歳の年より馬だつたから、このときはもうかつたなどと思いました。

何もはこぶものがないときは部隊で炊事の兵隊の手伝いをしたりして毎日軍の仕事をしました。手当はちゃんとはらつてくれました

た。毎月二百円で、いい給料でした。

軍の防空壕掘りは美里嶺で二日ぐらいやりました。それ以後は軍に使われるようになって何もしていません。竹ヤリ訓練も一日だけだし、部落の人たちにくらべてとくをしたと思ひます。各部落に割りあてて下地島に戦車壕を掘らしたことがあります。このときは部落の人は男も女もみんな勤員されました。勤員が悪いといって部落長が軍に殴られたりしました。壕掘りは兵隊もやつてはいましたが、しかし多くは部落の人がやりました。何か月も弁当持參で掘つたけれども、これはみんな民間の人がやつたのです。

伊良部にいた兵隊のなかにはひどいことをするのもいました。とにかく下の人より上に立つ人が憑つた。コナシという副官なんかは灯火管制の夜に魚をとつてこい、カニをとつてこいと言つて部落の人をいじめています。この人はよく部落の人を殴るといって相当評判も悪かったです。

いつ終戦になつたかよくわかりませんでした。これで家に帰えれるといつて兵隊が騒いでいたり、またあまり仕事もないでいつのまにか軍にも通わなくなつて、それが終戦であったように思ひます。ある日、軍に通うようになつてから一度も行つたこともない平良へ何かの用で行つて帰つてきたら、戦争に敗けてもういらなくなつたから、これまで軍に協力してくれたお礼だといつて、兵舎に使つていた松の丸太を二三十本くれました。これで馬小屋をつくりました。松の木のほかに小さな軍用の引き車も一台もらいました。

#### 差別される沖縄の人

佐良浜には昭和十九年の四、五月ごろ旅団がきていました。碧部

隊といつて旅団長は多賀朝四郎といいます。軍がきてから終戦まで戦車壕を掘らされたりで、部落の人は毎日作業に狩りだされました。作業はあさ八時ごろから夕方の五時ごろまで軍隊の指揮のもとにやつたが、食事は家に帰つて食べ、ただ働きでした。そのため各家庭の畑仕事はみんな夜になつてからやつてきました。

空襲のもつともひどかつたのは昭和二十年の四、六月ごろでした。私の隣家のあるおじいさんは作業に出るために朝早くツルハシの柄をすげているときに空襲があつて、柄をすげようとしてあげた手に機銃が貫通するし、奥さんは股の根つ子をやられました。二人とも私が止血をして佐良浜国民学校にあつた軍病院にはこんで手当をしてもらいました。一時なおつたように思つてましたが、その後傷風をおこして死んでしまいました。戦車壕掘りの作業中に空襲で死んだ婦人もいます。

また佐良浜の婦人たちは砲弾はこびもさせられました。佐良浜の

船着場までトラックが入らないものだから、トラックの通る部落の上方の平坦なところまでリレー式にはこぶのです。急な坂でせまい道を婦人たちは弾丸を一箱ずつ頭にのせてはこびました。食糧もそんなふうにしてはこんでいます。佐良浜の婦人たちは兵隊よりも強かったです。弾丸は全部といつていいほどに婦人がはこんだと思っています。

軍は民間の人たちを漁撈班に組織して魚とりもさせていました。漁撈班のとつてくる魚はもちろんのこと、一般の漁夫のとつてきたものまでとりあげる。私の祖父も季節になると毎晩イカ釣りに出たが、船着場に帰ってくると兵隊が待ちかまえていて全部とりあげてしまうのです。七十歳にもなる年よりたちが自家用の食糧としてとつくるものまでみんなまきあげてしまふ。冬の一月と三月ごろのよるの十一時、十二時の寒いさなか老人たちが苦勞してとつてくる獲物をみんなまきあげてしまふ。しょっちゅうそんなめがあうものだからあとはみんなも知恵をはたらかせるようになります。その夜の収穫のうちのいくらかは綱にしばって海にたらしておき、残ったものだけをこれで全部ですといつてさしだすと、兵隊はそつくりうけとつて帰つて行く。そのあとで海から引きあげて家へ持つて帰える、こんなふうに知恵をはたらかして家族の食べる分を確保していました。

それから佐良浜では軍の糧まつ庫からカンヅメを盗んだというの子どもたちが一日中桟橋のさきで罰されたことがあります。真冬に、吹きさらしの桟橋のさきで罰されることほどつらいことはない。桟橋のさきは部落中から見渡せるようになつており、みせしめ争ははげしくなるしでいつまでも建てられない。毎日作業と教練ばかりつづいていました。教練の指導には池間方清伍長や砂辺四郎さんらがあたっていました。

六月から七月ごる軍命で、下地村皆愛の陸軍飛行場工事のために生徒四〇五十人をつれていきました。十日間という約束で行ったのに、二十日になり、さらに三十日に延長させられました。兵舎にとまり食事は軍が出してくれたが、何しろ十日間の約束で行つているものだから着がえはないし、一ヶ月間大変な思いをさせられたものです。私は十九歳だったが、生徒のなかには同年も、年上もいて、作業中に徵兵検査で帰つていくものもいました。予定が一方的につきつぎとのばされるものだから、青年のなかには逃げ帰れるのも出たりしました。しかしその分残つているものにしわよせがくる、それで逃げないように監督もしなければならない。逃げた青年たちをさがすために平良まで歩いて日に三往復したこともあります。作業は滑走路つくりで、エンピで掘つたり地均したり、モッコをかいだり、毎日毎日同じことのくり返しでした。

食事は玄米と芋ヅルで、まったく少く空腹つづき。それに飲料水も少く、その少い水も飲んだらマラリアにかかりはしないかと気が気じやない。食事は一応一日三回はあつたが、何しろ小さな碗につけているので、内容よりも量をふやせといつちゅう要求しました。粗食で少い上に作業はきついものだから何かと私は作業班長の兵隊と衝突ばかりしていました。そのせいか兵隊たちは私に休め休めというのです。しかし生徒たちが、先生が休んだら自分たちがますますこき使われるから出でてくれという。そんなわけで一か

のためだらうが、小学校の四、五年生が十人くらい一日中すわらされていました。桟橋の根づきの船着場のところに衛兵所みたいなところがあつて、飯田少尉というのが部下と一緒に子どもたちを監視していました。子どもたちは寒いものだからお互いに丸くなつてくつつきあつて前の子の背をこすつて寒さをしのいでいました。

佐良浜に来ている兵隊のなかには、自分らは沖縄を守りに来ているのだから君らは当然何でも言うことを聞くべきだと平氣で言うのもいました。まるで戦争を引き起こしたのが沖縄の人間のせいでもあるかのように言つて。おまけに自分らをば東京の人、東京の人といつて、沖縄を馬鹿にしていました。自分こそ実際にはどこの馬の骨かわからんせに、実に伊良部の人を馬鹿にしてね。東京の人があれほど偉いか知らんが他府県から来た兵隊のなかにも程度の低いのはたくさんいたのですから。そのころのぼくは十九歳だし若くもあつたせいか、よしこの野郎ども、ほくも兵隊に行つたら君らを許さんと、思つたものです。私は昭和二十年三月に召集され、豊五六六部隊に入隊、トラック隊に入つて陣地構築、もっぱらタコツボ掘りばかりさせられました。

#### こき使われた青年学校生

私は昭和十八年十二月に嘉手納の農林学校を卒業して翌十九年一月佐良浜国民学校に就職、同年五月には伊良部青年学校に転勤しました。青年学校は開校したばかりで村役場に事務所をとき、忠魂碑のところに校舎を建てることになつていました。建築資材はすでに購入してあつて村役場の東の入江にうめてありました。ところが戦

月もの間、私にはろくに休む間さえなかつた。逃げた生徒をつれもしに平良へ出たりたまに休んだりすると、兵隊たちは生徒を殴つたり休止の時間をみじかくしたりでこき使つ。それに他府県出身の兵隊に思ひようによいかえすことができない。いわば言葉の抵抗みたいなものがあつて、つらかつたようです。

予定の十日間が過ぎて、さあきようははれて家に帰れると思ってたら、十日延長される、その十日も終えてさああすこはと思つたら、一夜明ければまた十日間延長されるでとうとう一ヶ月間も労働奉仕をさせられました。このため三度めの十日が過ぎると、生徒たちはあすまで待つたら大変だ、今夜のうちに帰えろうといふところが何しろ一ヶ月も家に帰らずただ働きしたので誰もお金を持つていない。そこで私は一足さきに平良の桟橋まで行つて共栄丸と交渉、佐良浜に着いてから払う約束で乗せてもらうことにしました。佐良浜に着いたのは夜も九時をまわつたころでした。そこで点呼をとつて解散したが、南部の伊良部から来た生徒たちはそれからまたクワなどの作業用具をかついで数キロの道を帰つて行くのです。とにかく一夜あけてさらに十日ものはばされるよりは何が何でも夜のうちに部隊をはなれることだというが、生徒たちみんなの気持でした。

何かと軍はすぐ青年学校の生徒を使つたがつていました。とくに女生徒などは炊事要員としてやたらに狩りだされます。いつも空飛にきて、どこどの字にいる部隊に何人と、勝手に場所も員数も決めてつれにくる。ひどいものでした。だからといって学校はいつでも応じていたわけではない。与那覇春吉校長は学校のつご

うを検討した上で応じたりことわつたりしていました。鈴木という兵隊が狩りだしにきたときなど、校長は生徒のことはすべて校長の権限だ、軍といえども事前に何の連絡もなくいきなり生徒を使うことは許さないといつてはねつけたりしていました。

### 兵は働き、中隊長は姿をかこ

私が入隊したところは瓦原の青年会場で、そのうしろの小高い丘にもいました。入隊した当初はお風呂に入つても背中を流してくれたりした古参兵も、一週間もすれば殴つたり蹴つとぼしたりでつらいものでした。富吉出身の新兵は家が近いから、あまりたたくと逃げ帰えるからいじめないようになつていたそうだが、やっぱりいじめられました。私はそれほどではなかつたが、ほかの人たちは軍人勅諭など棒記しているのにちょっとつまるとたかれ、そのためさらに度忘れしてたたかれるというぐあいでした。玄米一ぱいくらいの食事で夜の十時までタコツボ掘りや演習をする。このためみんな栄養失調になつて手がふるえ、あの小さなエンピが持てないありました。

私は銃剣術がよくできたからあまりこき使われず飯あげなどをさせられました。幹部候補生になつてからは、書類など仲間のものをみんな引きうけて書き、かわりにこつそり家に帰しては食べものをもつてきてもらつたりしたものでした。またマラリアで寝ている兵隊は、古年兵がほかの部隊の罐詰を盗んできてこつそり埋めているのをみては仲間に教えてくれるので、衛兵のときにそれをとつて食べるなど、富吉出身の兵隊たちはお互いにたすけあつたものです。

一番しゃくにさわつたのは私の中隊長が女をつれていたことです。女は女学校出の教員だとことでしたが富吉の人だということでした。兵舎の近くに中隊長専用の茅ぶきがあつて、そこに中隊長の女とその母親と妹というのが一緒に住んでいました。平良のまちの上流家庭のような生活をしていました。私たちも泥まみれになって作業をしているのに、あれらちは昼間からレコードをかけてたのしんでいる。それに輸送部隊でしたから食べものなどもぜいたくして布干堂で泳いだことがあります。あんまりめずらしいことなのでみんな不思議だと言つていたが、夕方隊に帰えると儀式用の軍装をして集まれという。民間人が近づかないように厳重な警戒をして部隊長が終戦になつたことを発表しました。負けたとは言わなかつたですね。『帰休』といったような、当分戦さは中止する、こちらは台湾軍と手をとつて米軍に対することになるかもしれないといつたようなことをはなしていました。

翌日からは銃についている菊の紋章をはがして、銃は束にして床下に入れました。八月の末か九月の初めごろ除隊して帰えりました。『帰休除隊を命ず』となつていて、初年兵や幹部候補生は本土防衛のために行くそうだ、というデマが飛んだりしていました。私は幹部候補生になつてましたから、とても心配しました。しかし別によばれることもなく、九月からはまた、学校の教員になりました。

### 漁撈班でいじめられる

伊良部村字池間添 仲間重雄（四五歳）

### フィリピンで捕虜になる

フィリピンには昭和十五年一月にわたりました。日本水産に漁業指導員として雇われ、長崎から渡りました。長崎や静岡など方々から来た指導員や漁師、工場で働く人々など、五十人単位で編成されました。フィリピンでは領海での漁業はフィリピン人をさえなければ認めないので、日本水産が四割の株をもつて合弁会社をつくり、日本から、こうして漁業指導員をおくりこんでいました。私は、漁業指導員でしたが、佐良浜からは十五~六人の漁師と一緒につれて行きました。はじめダバオに半年くらいいて、その後ミンダナオ島の一番西の端のサンボアンガに移りました。ここはスペイン統治下の首府で、ことばはスペイン語ばかりでした。昭和十六年十二月八日の宣戰布告はここで聞きましたが、間もなくしたらアメリカ軍が来て、ぼくらの会社を保護し、ぼくらはアメリカの兵舎にあづけられた。会社の職員は五十名くらいいたが、このほかあちこちにいた日本人およそ八百人が捕虜にされました。そのとき持っていたお金もみんなとりあげられました。腹にかくしていた人もみんなはしてとりあげられ、お金を持つている人は一人もいなくなりました。

ピケツというところのアメリカの兵舎にうつされたのは昭和十七年の正月でしたが、それから八日めには日本軍の爆撃がありました。ピケツというところのアメリカの兵舎にうつされたのは昭和十七年の正月でしたが、それから八日めには日本軍の爆撃がありました。そこには十五日くらいいたが、あんまり日本の飛行機の爆撃があつて危険なのでまた移動することになりました。通訳は小山といつて、日本から真珠取りに木曜島に行つてゐる漁師の子だそしが、日本語はあまり上手ではないが、とにかく通訳をしていまし

た。日本軍はいつも一日と八日に爆撃していました。そのころはよく「八日がくるよ」と言つていたものです。日本軍が爆撃をはじめると、ぼくらは日本人だからアメリカは殺すそうだという話が出で騒いでいました。ぼくらは二階の金網のなかに入れられながら、下から機銃を撃つてくるのです。だからたくさん人が尻の方から撃たれて死んでいました。ぼくの隣りでは若いお母さんが五六歳位いの子どもを股の下に隠していましたが、さいわい子どもにはあたらなかつたけど、お母さんは首筋をうたれました。また、津堅から来た若者は尻からやられてもまだ息があつて、自分に一回鉄砲をうたしててくれと泣いて頼んでいたがとうとう死んでしまいました。沖縄の人で死んだのはこの人一人ですが、何しろ八百人もいる捕虜のことでたくさん殺されています。

あるときぼくは、どうせみんな殺されるのならやつてみようと決心して、戦闘帽のあごひもをかけ、「この壁くらいみんなで押せば倒れるから、ぼくがさきに飛びだして守衛の兵隊の銃を奪いとれば十人や二十人くらい殺せるから、やろう」と提案しました。しかし捕虜のなかには兵隊もいて、少尉級の人も何名かいましたが、「そうちやいかん、ここには女と子どもがおるからおとなしくしなくちゃいかん」と言われて、思い止どまつたこともあります。

それからまた、全員マライマレイという遠い所の軍隊に移されました。そこには十五日くらいいたが、あんまり日本の飛行機の爆撃があつて危険なのでまた移動することになりました。通訳は小山といつて、日本から真珠取りに木曜島に行つてゐる漁師の子だそしが、日本語はあまり上手ではないが、とにかく通訳をしていまし

た。その小山が言うには、日本軍の飛行機は人がたくさん乗つてゐる車をみつけたら撃つてくる、撃たれたら味方の弾にあたって死ぬのだからそれまでの運命だと思えと言われたりしました。十五日くらいして元いたピケットに帰つたら、日本の飛行機が、日本人が千人くらいもいたのにいなくなつたといつてさがしてしていることがわかりました。ところがせつかく飛行機がさがしに来ているのになかなか外に出してもらえないのです。出ようとすると米軍が鉄砲を向けるから出られないのです。これじゃいかんとぼくは思いきつて鉢巻をしめ、はきものもないから杉下駄をはいて外に出ました。犠牲になつてもいいと思つていきましたが、どうしたことか米軍は鉄砲をうたず、飛行機は低空してきてわかつたというような合図をしていました。その夜じゅう飛行機はずつと上空をとび、ぼくらを守つてくれてゐるような気がしたが、翌日は少尉に率いられた日本の兵隊が三十人くらいきてくれました。みんな福岡の人だと言つていました。収容所の米軍は、多くはフィリピン人で五十人くらいいたが、日本軍がきたらみんな逃げていきました。アメリカ人の一番偉い人は少将だといつていて、その人は日本軍がきたら自分らが君らみたいなめにあわされると言つていました。

しかし福岡の兵隊たちは一里くらいいきまで偵察するのでぼくらにかまつておれないと言うのです。それは大変だ、ぼくらのなかには百人くらいもからだのよわっている人もいるのに」といふ、いや後から大隊がくるから大丈夫だと言つて行つてしましました。あとから四、五〇人くらいの大隊が来て部落の真中まで退却して夜警することになりました。ぼくらはね医者さんの家らしいところにとまつたが、翌朝起きてみると、二人のフィリピン人が兵隊に捕えられていきました。兄弟が負傷したので、薬をさがしにきたと言つたが、タガール語を使つてゐるのは兵隊だといつてヤシの木にしばり、手拭で眼隠しして一人は銃殺、一人はパイプで殴り殺しました。ぼくはそのときはじめて人を殺すのをみました。また相当偉そうな人もつかまえられてきたが、これは四～五名の人が手足を押さえつけて殺していました。

ぼくらは兵隊にたすけられるまで六か月間くらい、山の中へ行つたり、あつちこっちの収容所を行つたり来たりしたが、一日に十里くらいは歩かされていました。それは日本軍から逃げるために米軍がやつたことで、疲労と栄養失調で病気になる人も相当いました。

#### 船とりに帰えり飛行場建設に従事

軍にたすけだされてからは、ぼくは飛行機基地の食糧倉庫で現地人を使って通訳をしていたが、軍の命令で船をとりに沖縄へ帰えることになりました。米軍の潜水艦に船はつぎつぎにやられており、海のモクズになるから何にもならんと言つて、船とりに行くことを拒んでがんばったが、坂本という大佐が、君でなければこの仕事はまつとうできないと言つて叱りつけているから仕方なしに帰つきました。小さい船をたよりにやつと宣古にたどりついたのは昭和十八年の末ごろでした。

佐良浜に帰ると同時に、伊良部村長の友利克が「ちょうどいいところに適任者がきた」と飛行場工事の監督にさせられました。各字から割りあてで百人くらい徵用したが、飛行場工事につれて行つ

て働く人がいないというので、浜に着くと同時にまるで待ちかまえていたようにして、その人たちをつれて平良へ行き飛行場工事にあたりました。飛行場工事は三ヶ月でした。しかし百人の男たちはみんな家族もちだし、三ヶ月も家をあけてしまつたら、生活に困つてしまふのは明らかです。それで軍には内緒でみんなで相談して、日を決めて三日くらいずつ伊良部村に帰つて働いてこいと言つて帰しました。四～五名ずつ交替して帰しました。兵隊は官給品ですむからいいけど、ぼくらは一銭の手間もないのだからね、こうするほかはなかつたわけです。手間は一ヶ月三十円といつていて、実際には農業会に貯金してあるといって一銭も手渡さないのだから、ないのと同じだったので。ぼくはマラリアにはかかるし、二人の子どもが那嘲の学校に通つてるので送金をしなくてはならないし、家にも送金しなければならないといつて、本部づきの少尉と大噴礮になつたこともあります。

飛行場では滑走路をならしたり、弾薬庫をつくったり、タコツボ壕を掘つたりしていました。三ヶ月というのははじめから決つていたのではなくて、勝手に帰つてきました。何しろ家の暮らしもたてなければならなかつたですからね。

#### 軍命で漁撃班つくる

飛行場作業をやめて帰つてみると、今度は池間添の常会長をさせられました。もう船とりにも行けないし、乗つていく船もなかつたですからね。常会長になつてからといふものは毎日軍の命令で作業に狩りだすことでした。伊良部村一円がそうだったと思うけど、佐

良浜の人は長山方面やヤラブザキ方面で戦車壕を掘つたり、戦車を止める障害物を築いたりしました。松林の松を全部真中あたりから切つて根ツ子の部分を残すとかして戦車の進行を止めらる障害物をつくつたりしました。佐良浜には旅団がいて、多賀少将という司令官がいたが、作業には各戸から必ず一人ずつ狩りだされました。しかし人間の家ですから、病人もおれば看護しなければならない人もいるわけです。それでどうしても作業に出られない家も出てきます。そうすると軍は容赦なくたたいていました。とにかく軍のやり方はひどいものでしたよ。

また、ぼくらは碧部隊の漁撃班もさせられたが、毎日サバニで軍用の魚とりに行きました。何ぼいのサバニがいて漁撃班が何組あつたかは知らないが、ぼくらの班は七名でした。毎日漁に出たが、大体一回平均の水揚はわかつており、少し多めにとれた時は自分の家庭のことも考へて持ち帰つたりしました。ところが闇に流しているものがいるといってたたかれたりするのもいました。しかし実際に漁から帰えるのを船着場で待ちかまえていた兵隊が横取りするものだから、指示をうけた部隊に持つていけない場合が多かつたです。そのためになぜちゃんと持つてこないかといつてたたかれたり、罰されたりした班もあると聞いたことがあります。大抵奪われたことがじょうずに言えないものだから、闇に流したんだろうとか、いたたかれているんですね。

なかには漁撃班で一般の人でも、せつかく漁に行つても途中で奪われてしまうから漁にも行けないというはなしはすいぶん聞きましたよ。

佐良浜の空襲もひどかったです。とくに平良＝佐良浜間の運搬船をめがけてよく機銃を撃つてきました。船着場の近くはみな焼けてしまいました。時限爆弾もすいぶん落ちました。西原雅一さん

の庭にも時限爆弾が落ちて、何時間後であつたか突然爆発して間借りしていた本永玄太郎さんは爆風で大きな岩かけに吹っ飛ばされたし、仲地まさ子さんは片足をもぎとられて死んでしまいました。本永さんはそれがもとで戦後も長いこと大変な恐怖症にかかっていましたよ。

敗戦については八月十五日よりあとになつて聞いたように思いました。漁撈班で魚とりに行くといつたら戦争は敗けたらしいよというはなしが出て、ぼくは「戦争は敗けたから魚とりには行かん」と言つたら、兵隊が、「これまでやつておった仕事はつづけてやらんといかんじやないか」と言われたものです。たぶん戦争に敗けたことをすぐ民間の人たちに知らせなかつたのは、命令を聞かなくなつては困ると思ったからじゃないですか。

## 七、多良間島

当時多良間国民学校長 藤村市政

### 初空襲

昭和二十年一月九日。米軍多良間ヲ初空襲。不幸ニシテ三年下地節子ハ即死、四年佐和田朝功負傷ス。〈多良間小学校沿革

史、以下多小史と略称、による）

多良間の水納島の宮国岩松のメモによると、水納島では、昭和十七年頃には軍事訓練が行なわれていました。五つの世帯を一つの班にし、七つの班がつくられ、七名の班長が常会をもち、その常会の話し合いによって、軍事訓練として、竹やりでの訓練や、消火訓練をするようになりました。

昭和十九年の九月には、アカトンボという練習機九機が、台湾へ移送中水納島に不時着しました。これは特別攻撃に使われるようになつたものであります。

多良間（多良間島と水納島）に直接敵の攻撃のあつたのは、昭和二十年になつてからであります。それは、十・十空襲から三ヶ月も

おくれての一月九日にあつたもので、グラマン機四機によるものでした。

その日は、郵便局を通じて、平良の方から午前中に空襲警報が伝えられました。

連絡をうけた国民学校では、さっそく、児童たちを帰宅させ、部落（塙川と仲筋）中をまわって、警戒をよびかけました。

午後一時ちょうどだったと思われる頃でした。グラマンが南の方からやつてきました。

私は職員室の窓からみていましたが、学校の東の道路あたりから、島の部落の中央付近を北東の方へ、機銃掃射をしながら、轟音をたてて、飛んでいきました。このグラマン四機は、続いて、水納の島をおそいました。

多良間島では、子守をしていた一人の少女（初等科四年生）が銃弾をうけて即死し、同じ部屋にいた少女（高等科二年生）が腹部を撃たれました。飛行機の音をきいて、奥座敷に逃げこもうとした処を機銃弾に當たつたのです。腹をうたれた少女の方は、防空壕の処までかけていき、大声でわめきました。人々は医者を呼べとさわぎましたが、そこでこと切れてしましました。

五九歳になる羽地カメという女の人は足に機銃弾をうけて大けがをしましたが、四、五日うちに、破傷風で死にました。

多良間島では、この三人の死者の外、五人が負傷しました。垣花カマド（当時五九歳）は足に負傷、五年後に死亡。山城常教（当時五三歳、船長）は指にヶが、佐和田朝功（初等科生）片うで切断。下地朝栄（当時三八歳）軽傷、花城ヒデ（当時二〇歳）頭にヶが。水納島の方でもひなん壕で、四人の女子が殺されました。

（注）多良間国民学校学事月報によると、昭和二十年一月の分に、初一女一減、初四女一減とあります。初一女の方は水納分校の分です。

### 御真影

裕仁天皇とその皇后の写真（当時これを御真影といいました）は、昭和三年の十月二一日に多良間小学校にもつてこられました。昭和六年には一たん奉還され、新しいのを迎えることになります。昭和六年の暴風で、校舎が倒壊したことから、八月十

五日平良第二小学校の奉安室にうつされ、昭和七年十二月三一日に再び多良間小学校に迎えられました。

### 空襲下の生活

昭和二十年三月空襲次第にはげしく村内から郊外へ疎開する者多シ。修了式挙行。（多小史）

警戒警報や空襲警報はすべて郵便局の無電を通じて島にもたらされ放されていました。

れました。警報は警防団が部落民に直接にしらせる役割を負いました。

た。

旧藩時代に船の往来の見張りに使われた石づくりのやぐらの一つ八重山遠見台の上で、青年達は対空監視に当りました。その台のかわらにかやぶきの詰所をつくり、交替で監視に当つたものです。

村民は一月九日の初空襲で、大きな衝撃をうけました。その住家を棄てて、それぞれの耕作地にうつり、大きな岩の下などを掘つてそこを生活の場にしました。ときどき見廻りに部落の中に帰つてみるのですが、いつ撃たれるかわからない集落の中は、手はつけられず、草だけがぼうぼうと生い茂りました。

南方へ行く途中、その乗船をやられて上陸してきた陸部隊（船兵）もいることはいたが、ときに芝居をして見せる位で、戦争については何もしませんでした。村民の中に混つて避難をするのが、せいいいっぱいに見えました。とりたてて村民に害を与えるのでもないのです。初めはもつてきた食糧の米などがあつたのですが、配給は途絶えてしまい、結局は、分散して村民と家族同然、その食糧を得てくらしていました。

昭和二十年四月一日 沖縄島に米軍上陸以来空襲はげしく警報発令中ニツキ児童の招集不可能になりました。月明の夜を利用して疎開地に於て区域別に招集し、戦争時中の心得、最悪の場合に処する態度等を話し、児童をして安心して生活出来るよう取計る外良き方法がなかった。

四月 五日 敵機四機来襲。機銃掃射をなす記念館に数発命中。

四月 七日 敵機数回にわたり来襲。被害を認めず。

四月一四日 敵艦載機及ボーアングB24来襲。爆弾投下。学校

北の高江洲良包氏宅外九軒全焼……学校が目標トナツテキル様デシタ。

四月一六日 非常持出箱（重要書類）ヲ嶺間神社ニ移転ス。

四月二〇日 敵機四機来襲。学校を目標トシテ爆弾投下被害あり數回来襲セルモ被害ナシ。

六月一九日 ロケット砲弾二十余発投下……相当被害アリ。

八月 一日 敵一機爆弾投下記念館運動場の立木、堀等被害大ナリ。（多小史）

駐在の巡回は平良出身でした。自分で辛をつくっていましたし、妻、あわ、まめなどもつくっていました。

教員の給料も昭和十九年の十月頃からは不渡りになりました。結局自活しなければなりません。沖縄本島からきていた四人の新卒の先生方は出征していましたので、職員十五人には他地の出身者はいませんでした。

畑の耕作などは、晩はたらいでいました。

監視がよく連絡してくれたので、空襲の合間をみて、昼、耕作することもできました。

空襲は連続的ではないのですが、いつくるかわからんので、みな避難を続けて歩きまわつてきましたがね。陸軍中野学校出身だということでした。

避難小屋では、山羊や馬のごちそうもしました。

その男が将校だったことはわかりました。終戦後、平良の将校集会所で、将校の服装をしたのを見かけました。それまで、島では国民服をつけて歩きまわつてきましたがね。陸軍中野学校出身だということでした。

終戦直後ききんがやつてきました。それで海からひきあげたくされた古米をもつてきて、庭にはして食べたものです。

それでも足りません。それでソテツを食い出しました。

ソテツ中毒で、犠牲者もいました。

泉川家で三人、宮城家でも四人が死にました。

バイラスでサツマイモが全滅してしまいました。それで、平良からタピオカの苗木をとりよせて植えたのですが、タピオカでも、何人も中毒する者がいました。

配給というものが行われるようになつたのですが、戦後三年目、当時の村長が配給の不正でひつかかり、それで後任に是非でてくれといふので、私は校長をやめて村長になりましたが、最初にやつた仕事といえば、芋かすの買い出しでしたね。澱粉をとつた残りのサツマイモのかすを、議員二人をつれて八重山までいって買ってきて、村民に配つたものでした。

家主を軍刀で脅やかす

学校にはきていました。そしていつも一人で行動していました。

何か、住民の行動を監視している。そう島の人々は感じました。

スペイではないかなと、人々はいっていました。

多良間には特攻隊が来ていきました。私のうちと向いの青木さんのお家に十人くらいいました。このうち二人は将校でした。原田とか山口とかいう名前の兵隊がいました。多良間を守るためにきたのではなくて、特攻隊の訓練のために来ていたと思います。いつも北の海へ行つて訓練をしていました。何か小さなボートのような船をいくつかもつてきていて、それをみがいたり、発射訓練か何かをやつっていました。艦砲射撃があるからといって一度平良へ行つてました。

が、しばらくして帰つてきたことがあります。「艦砲射撃があるの自分で自分たちは構えていたが、べつにそれらしいこともないのでまた多良間にきてみなさんに会うことができた」と言つていてことをおぼえています。

確かに私の家には六畳間に兵隊ばかり八人いて、青木さんの方には将校をふくめて四人いたように思います。部屋をかりるだけで、食事は自分たちでつくつていました。家にいた山口という兵隊が父（垣花常範・当時四十八歳）を馬鹿にしたようなことを言って、争いになつたことがあります。争いの原因ははつきりしないが、父が「いくら兵隊だからといって、あまり横暴なことをすると、島の人たちも黙つてはいられない」と言つたと、山口といふ北海道出身の兵隊が「チャンコロが何を言つたか」と言つて刀で斬りつけようとした。それで父もすっかり怒つてしまい、「この家を出でいけ」といったような出方でした。そこへ青木にいた将校がきて、「銃後の国民の協力なくして戦争ができるか」と言い、山口を叱りつけてようやくおさまったようにおぼえています。

特攻隊の人たちは終戦になるまことに平良にうつっていました。

三か月ぐらいしかいなかつたように思います。

(注1) 渡久山サダの弟垣花義夫は、「二十歳前後の青年たちで、人間魚雷の訓練をしている」と聞いたと証言している。

#### 教員やめ食糧の自給

多良間村字塩川 野原雄吉（三十一歳）

#### 教員やめ農林技手へ

多良間国民学校で教員をしていたら義兄の青木雅英（県議）から教員をやめて食糧増産のために農林技手をやらんかとすすめられました。青木のはなしでは、どうも役場としての農業指導がまだたりない。教育も必要だが、いまはこういう戦時下だから、食糧増産がないじだから思いきつてとびこんで、みんなを救うようにしてくれとのことでした。確かに戦争がほげしくなつていくと多良間のような小島は海上輸送が途絶えたら大変なことになる、それにもともと農林学校を出ていることだしと思つて引きうけることにしました。

沖縄県農林技手といふことで多良間村駐在でした。

部下職員は一人もおらず、村役場の技手と相談していろんなことをやりました。これまでの作物はもとより小麦、大豆、それに大根や人参、カンラン等の野菜をもつくるよう指導しました。

村民ははじめ私が教員までやめたことに非常にびっくりしていました。それでもみんな関心をよせてくれて一生懸命に増産にはげんでいました。

でくれました。私はよくみんなにこう言つたものです。「学校の教育も必要だが、こうした戦時下ではお互いに増産をやらんと、こんな小さな離島ではもう別から食糧がくるとは考えられんから、農業の改良に大いにつくそう」自給自足の重要性を強調しました。

おもに主食になるものをつくつたが、小麦などは供出させられたように思う。県からの指示もあつたように思うけど、おもに自分の計画ですみました。いま何を必要としているかといった点を考えてやりました。昭和十九年の終りころまでやつたと思います。その間、青年学校の軍事教練をしたりしていました。

#### 意味のわからぬ伊良部防衛へ

昭和二十年に入つて、空襲が始まることになってから村民のなかで召集に該当する連中を四十人ぐらいつれて、班長として平良へわたりました。野原越あたりで一ヶ月くらい作業をさせられて、それからまた十五、六人をつれて伊良部へ渡りました。みんな正規の軍人ではない。兵隊の経験のないものばかりで、防衛隊といったようなものだつたと思います。私だけが兵隊あがりで予備伍長。小田准尉というのが訓練にあたつていました。

伊良部では村役場の何か広い畳の間に全員とまつて、おもに防空訓練をしました。別にどこかへ通うということもなく、また地元との接觸もなく自分たちで防空訓練をしていました。敵の上陸に備えてこうしようとか、空襲の場合はこうするんだとか、そういうことをしていました。勿論伊良部には軍の指示で行ったのだが、やりっぱなしで指示はこない。なぜ伊良部へやらされたのか、わからん

のでお互におかしなめにあうものだとはなつたりしていました。何しろ年令もませこせでね。私は三十歳でしたが、二十五、六歳もおれば三十五、六歳もいる。しかも兵隊の経験がないばかりか、私以外は青年学校の経験しかないのだから不思議でした。

結局命令があるうとながらうと、勝つためには何でもやるという

氣概だけがあつたように思います。しかし軍の指示もないが、民間とのかかわりあいもない。役場もあまり関心をよせていなかつたよ

うに思います。食糧は米の配給はあつたが全般的に非常に粗食でた

りない。それで民家に行つてサツマ芋や必要なものを買つておぎなつていました。炊事も自分たちでしました。軍からはわずかばかり

の食糧だけで、手当もなく被服の配給もなかつた。

終戦については直接誰からも知らされなかつた。二、三日あとだつたと思います。何處からともなく自然にわかつてきました。これだけ根こそぎ狩りだしても負けたのか、と思う反面、こんな役にたたないものまで狩りださなければならぬところまできていたのだから負けるのは仕方がないなとも思いました。終戦については軍から聞かされなかつたかわりに、誰からの指示、命令もまたず船が出たのをさいわいみんな一緒に平良へ渡りました。平良には四、五日いたが武装解除のはなしは聞きませんでした。また滯在中アメリカ兵にも会わなかつた。まだ來ていなかつたと思います。とにかく一日も早く家に帰れりたくて船が出たのをさいわい多良間へ帰つてきました。

平良町字西里 宮国泰誠（三十歳）

## 薬品不足でみすみす見殺しに

多良間村診療所の医師として赴任したのは昭和十九年三月。戦時中のことだから薬品も軍にとられて、民間の医者はもうとぼしくてね、破傷風の血清なんかはまったくありませんでした。さいわい診療所には硫酸マグネシウムの粉末がたくさんあつたので、それを蒸溜水に溶かして注射しましたが、よく効きましたね。

これは直接戦争には関係ないが、ある婦人が製糖車に指を噛まれて、そこから破傷風菌が入つてしまつたのです。血清がないからどうしようもないと一度はことわりましたが、主人が「先生何とかしてください」と床にひざまずいて手を合わせて頼むのです。いろいろ考えた末え、赴任のとき高原（恵典）先生にもらつた治療の本をみたら、たつた一行「硫酸マグネシウムが破傷風に卓効することがある」と書いてあつた。ほかにうつ手はないし思いきつてやつてみました。看護婦もいないから自分で蒸溜水をつくってそれに溶かして注射したんだ。そしたら驚きましたね、水も飲めないほど口もこわばつていたのがちゃんとなおりましたよ。

それ以後は機銃掃射がもとで破傷風をおこした人はみなこの方法でたすけました。昭和二十年の一月ごろから多良間も空襲がはげしくなつてきましたが、軍医予備員として召集され野原越で四週間の訓練をうけて三月初めごろに帰ってきたら、機銃にあたつて死んだ

人もおれば、片腕をおとしたものなど負傷者が五、六人出ていました。そのうちの一人のおばあさんが破傷風をおこしていました。さいわい製糖車でやられた婦人のときに硫酸マグネシウムでおなじみの治療をほどこしてうまくあいにないおつたものです。

これは終戦直後のことですが、爆弾の粉末をとりだして漁業をやっている一家がいました。父親が火薬を一升ビンに入れて裏座に隠してあつたらしい。ところがそのことを知らないその青年が夜遊びから帰ってきてたばこの吸いがらをポンと捨てたつまみが火薬に引火、大爆発を起こして全焼しました。母親と娘一人、孫三人が死んで、娘一人とその青年が火傷しました。青年は背中をすっかり火になめられているから数日後には死んでしまいました。娘さんの方はせつかく助かつたのに用水池で洗濯したりするものだから、そこで傷口から破傷風菌が入つてしまつた。この人も硫酸マグネシウムでおりました。

血清もない、蒸溜水もない、薬品も不足の状態でしたから助かるはずのマラリアなども救えなかつたですね。戦争中多良間からも西洋の木炭焼きにたくさん的人が強制的に徴用されていました。向うで悪性マラリアで死んだのもいるし、帰つてから発病するのもいました。ところがマラリアに効くバグノンはほんのわずかしかない。みんなにやれば中途半端で、誰もたすかる見込みはない。医者としては困つた問題だけれども、少い薬だからどうにもならないのです。結局池城という家内の親戚すじの一人だけに少いながらも注射をしてようやく助けました。

マラリアに感染したものは西表からは戦後になつてから帰るものもいましたが、キニーノ剤がなくてどうにもならなかつたですね。みすみす薬があればたすかるはずの命を見殺しにせざるをえなかつたものです。

## 軍医予備員の召集をうけ弾薬運び

戦争もだんだん日本本土に近づいてくると「医者もいつでも軍に呼んで使えるようにしなければいけなかつたんでしょうか。昭和二十一年二月には「軍医予備員」という名で召集されました。宮古では高原恵典、西原雅一、上里忠勝先生などが老齢ということではざされ、福嶺紀仁、下地憲俊、友利正雄、中村圭介、奥平恵寛、それにぼくの六人です。それからどうしたことか八重山からも大浜信賢さんが召集されていました。これらの七人が上等兵として山中部落の部隊に入れられました。本部は野原の青年会場にあつて、そこへ行つて連隊長にあいさつをしました。そのとき連隊旗をおがましてくれたが、なかみのない房ばかりのものでしたよ。ぼくらの入つた中隊は山中部落の原野に茅ぶきの長屋をつくつていてそこに入つたわけですが、軍医予備員とは名ばかりで、普通の兵隊と一緒に兵としての訓練を二週間うけました。

そのころマリアナ基地に集結していた敵機動部隊がどこへ行つたかわからないという情報が入つていました。たぶん沖縄に向つたんじゃないか、それで宮古にも艦砲射撃があるかもしれないというのです。二月十一日の紀元節はそこですまして、二日ぐらいしたら、敵の艦砲射撃が一、二日つづいてあとは上陸を敢行するということ

で、甲戦備といったかな、ぼくらも戦闘配置につかされました。側嶺部落の、沖縄からは東北の方に下地青年学校があつて、そこ南の山に幕舎をつくつて入りました。そこに行つてから、野原越の壕に入れてある弾丸かつぎを命ぜられました。ところがわれわれの中隊からはぼくら軍医予備員の七人だけがやらされるのです。こいつもはあと何日もせずして陸軍病院に行くんだから、こいつらを使えということだったんだな、夕飯をすますとすぐに「軍医予備員集れ！」と母令がかかる。弾丸はこびの使役に使うために医者だけ七人トラックに乗せられてどこへともなくつれて行かれました。真ツ暗やみのなかおまけに雨はびしょびしょ降る。仕事をしながらもいま何處にいるかさえわからぬ。夜が明けてから気がついてみると、野原岳の北、ようするに野原越なんだな。

トラックが壕のところまで入らないから、壕からトラックまで、あのソーメン箱のようなものにつめこまれた弾丸をかつぐ。重いやつを一個ずつかついで、徹夜でトラックに積みこむ。兵隊はいろんなところから集つて来ているけど、ぼくらの中隊だけが医者。それ夜中のことではあるし、雨は降る、寒い、おなかはすく、というぐあいでみんなだらだらしているわけだ。どのだれかわからんが指揮官らしいのが「集れ！」という。「これで戦争ができるか。もう少し気合をこめて仕事をやれ」。再びみんな黙々として始める。もうくたくたですかね、あいだらだらだつたな。

夜が明けたのでわれわれの番は一応終つて自分の部隊に帰ることになりました。われわれをつれて帰る指揮官みたいなのが桜井といふ特務曹長。山中部落を通りながら、福嶺先生は長年平良のまちで

開業しているから部落の有志をよくわかるわけです。津嘉山という町会議員の家に行こうじゃないかと言ひだして、みんなあんまりひもじいものだから一緒に立ちよつて、芋を食べたり黒砂糖をなめたりしたが、そのときはほんとに生きた心地がしたな。さすがに桜井特務曹長もこれには反対しないで、自分も一緒にごちそうになつていましたよ。

それから側嶺の幕舎に帰つたんだが、徹夜で仕事をして来ただから、昼ぐらい少しは休ませてくれると思つたが、そうもいかないんだな。ほかの兵隊たちはみんな何處かへ行つておらず、ぼくらは今度は側嶺の畑の近くでタコツボ堀をやらされる。このときも近くの農家の人たちが、何しろ顔見知りの医者ばかりいるものだからお茶をもつてきたり油味噌をもつてきたりしてサービスしてくれる。そうするとそこらにいるヤマトの兵隊たちもみな集つてきて、一緒にごちそうになるわけです。

昨夜は徹夜で弾丸運びをした、きょうはきょうでタコツボ堀をしたものだから、今晚ぐらいゆつくり休ませてくれるんだろうなと思つていたら、また「軍医予備員は集れ!」とくる。ところが大浜信賢先生はほんとかどうかわからんが「シが痛みだした」と言つて休む。それから下地恵俊、友利正雄先生は、「だれか水を汲んでこい」と言つたら、「わたしが行つきます」と、二人行つてしまふ。幕舎は部落から少し離れているから、飲み水はいつも石油罐をかついで部落にもらいに行つていました。また、部落に行けば何か食べものにありつけるしね。誰もが水汲みを希望していましたよ。何しろあのころの部隊の食事ときたら塩汁に芋ヅルがちょっと浮いていました。

の方は何ともなかつたけれども、落ちた弾丸箱をまた積むわけです。

こうして幕舎のある林までどうやら運びこんだが、それからまた夜の明けるまえに一個一個ついで林の中を運搬しなければならぬ。そこら一帯はタコツボがいっぱい掘られている。弾丸箱をかつきながら、もしもそれに落ちたらそれこそ足でも折るんじゃないか、ひやひやしながら運んだものでした。こんなひどいめにあうぐらいいなら死んだ方がいいとさえ思つたりしたものです。

二週間の日程を終つて、雨の日でしたがまた野原の連隊長にあさつをして、習日から鏡原の陸軍病院へ行きました。鏡原国民学校がそそくり陸軍病院になつていて、門のあたりに茅ぶきの小屋ができていてそれが陸軍病院の事務所、薬局、倉庫みたいになつてしまつた。そのあいだいにちょっとした木造の掘立小屋があつて、そのうちの一つがわれわれ軍医予備員の宿舎にてられた。そこで七人が寝起きしたわけです。今度は作業は全然ない。ただ講義のあるときによつと行って聞いて、あとはまたすることもなく宿舎でぶらぶら。ひまだから上着をとつてシラミつぶしをする。朝全部とつて、もう大丈夫と思っても、また午後になると必ずいる。天気のいい日には病院の兵隊なんかは庭に出て芝生に上着を広げ、日なたぼっこをしながらシラミをつぶすのが多かつた。あとで福嶺先生に聞いた話しだが、自分のからだを自分で始末することのできない兵隊は、手術台の上にのせられてもシラミがうようよしていたそうです。

陸軍病院では別に変つたことはなかつたですね。ただ軍医として

るといどものものだったからね。夜になると畑へ行つて大根をぬき、ニンニクをとる。そういうのは普通のこと。だから二人が「わたくしらが行きます」と専んで水汲みに行つても何の不思議もないわけです。

しかし三人もぬけてしまつていてるのに「軍医予備員は集れ!」と言われても四人しかいない。昨夜ぼくらがトランクに積んだ弾丸が大隊ごとに分けられており、そのなかからぼくらの中隊分をこれからとりに行くと言つんだ。行きは馬車であつたかトランクがあつたかはつきりしないけど、とにかく約一ヶ月も雨が降つていて大変な道でした。山の中に格納されているのを荷馬車二台に積んでね。福嶺先生と奥平先生は前の馬車に、中村先生とわたしはうしろの馬車に積みました。帰りは乗りたければ乗れと言つて、夜のことだし、道も悪いから歩くのは大変だし乗ろうかということになつて中村先生とわたしはうしろの馬車に乗つた。福嶺先生と奥平先生は馬車が出て前に歩くと言つて軍歌をうたいながらさきに歩いて行く。

ところが、きちんと積まれていない上に組をちよつとかけてあるだけだから、馬車がぐらりとゆれると弾丸箱ごとぼくらもずり落ちそうになる。落して下敷にならうものなら大変だ、もうまつたくひやひやのしどうでした。しかも近道をするといつて本道を通らず畑の道に入つたんだな。しかし夜は暗く、デコボコが見えないとより、どこが道だかわからないというあります。とうとう前の馬車がどんどん落ちてしまつて、馬は膝を折つて坐つてしまふ。箱も落ちる。桜井指揮官はどこか打つたらしく大声でわめている。ぼくら

の教育だけだから。死者はたくさんみました。必ずしも爆撃で死んだものだけでなく、むしろ栄養失調とか、あるいはマラリアで死んだのが多かつたようです。

軍医予備員には、あとから山内朝典さんも加わった。訓練は二週間、二週間のしめて四週間で、二月いつぱいに終りました。福嶺、友利、下地の三先生は、ひきつづき終戦後もなお十二月までいたようです。おかげで戰時中の平良の町には二、三人の医者しかおらず、病人は放置されていましたともえます。確かに疎開したり、田舎に引込んだり人は少なかつただろうが、いずれにしろ交通機関はないし、空襲ははげしいし、医者にかかる状況ではなかつたでしょうね。

わたしが再召集を免がれたのは、多良間に一人しかいない医者だからだと、あとになつて軍医少佐の山田という人が當原先生にはなづ、病人は放置されていましたともえます。確かに疎開したり、田舎に引込んだり人は少なかつただろうが、いずれにしろ交通機関はないし、空襲ははげしいし、医者にかかる状況ではなかつたです。

わたしが再召集を免がれたのは、多良間に一人しかいない医者は部落を捨て、畑の番小屋に疎開していました。それまで診療所は部落の中の国民学校と村役場の中間にあつたが、とてもここでは仕事ができないので向うの人たちがいろいろ考えてくれて、北の部落はずれからおよそ百メートルさきの山の中の運城御嶽へ移ることにした。拝殿では診療はできないので、庭の方にちよつとしたおろしを木麻黄などありあわせの材料でつくつて、診療をはじめました。

#### 食糧不足でソテツ中毒死も

三月の初めに多良間に帰つたら、連日の空襲をさけて村の人びとは部落を捨て、畑の番小屋に疎開していました。それまで診療所は部落の中の国民学校と村役場の中間にあつたが、とてもここでは仕事ができないので向うの人たちがいろいろ考えてくれて、北の部落はずれからおよそ百メートルさきの山の中の運城御嶽へ移ることにした。拝殿では診療はできないので、庭の方にちよつとしたおろしを木麻黄などありあわせの材料でつくつて、診療をはじめました。

近くには墓地が多かつたが、駐在巡査や郵便局長らが防空壕をつくって住んでいました。

しかし村の人びとが疎開している畠の一帯は、ちょうど部落をはさんでわたしのところとは反対側。往診するにも、患者がくるにも空襲をさけて逃げたはずの部落を通らなければならない。往診の場合には大抵向うから馬を持ってくれたのでそれを利用したけれども、途中で空襲にあうと馬を放りだして岩蔭にかくれたりして……。べつにこちらをねらってはいないのかもしれないが、やはり敵機がくるとねらわれているような気がして、向うからくるとこちらの岩蔭へ、こちらからくると向うの岩蔭へとかくながら、島のすみからすみまで歩いて往診をしていました。

食糧不足も大変なものでした。何、る運搬船が定期に来なくなってしまった。昭和十九年にもソテツを食べた家族六名が、きょうは三名、あしたは二人、あさつて一人……と死ぬ。三日もつづけて葬式を出します。大変なものでした。ソテツ中毒というものは医学の本に也没有。このときはじめて私はソテツの中毒死をみました。

診療所から一五〇メートルくらい離れた家で、長男夫婦が枕を並べて寝ている。治療して帰り着かないうちに今度は「別のものが……」と呼びにくる。行つたらもう意識不明。その日のうちに長男夫婦と別のもののが死に、一緒に葬式に出たおばあさんがその夜死ぬ。一番あとに末の弟一人が残つたがこれも三日めに死んでしまった。ソテツを食べたものみんなが死んでしまいました。

サツマ芋はみんなつくつていきました。たくさんとれるときは水納に送りだすほどだが、少いときは自分らが食べるのもない。何

も戦争は避けられるだけ避けたいと思います。

### 三日後に終戦を知る

軍隊関係では、十名ていどの特攻隊らしいもののほかには供出物資を運びに来たのが七、八名いました。船長は山口県大島の人で岡村と言つていました。南方行きの船に乗つてきましたが漲水港で敵機にやられてしまい、宮古の部隊に編入されて毎日タコッボ掘りをさせられたらしいです。そうしているうちに久松あたりの漁船を徴用して多良間の供出物資を積みに来たということでした。指揮者が北海道室蘭の人で、日根という伍長。こいつが非常に横暴な奴で、たゞこの供出もみな日根がさせていました。いつも威張りちらして岡村船長や船員とも折りあいが悪かったようです。岡村さんたちは診療所にもよく出入りして食事を一緒にしたりしてましたが、宮古には帰りがらなかつたですね。「きょうは天気がいいから出ます」と言ひながら、なかなか船をださない。湖かげんがどうとか言つてね、何とか口実をつくつては帰らず、終戦までいましたよ。

終戦を知ったのは三日ぐらい後だ。往診の帰り部落のなかを通り、顔見知りの仲松という青年が、「先生、終戦になつたらしいですよ」と言うのです。ちょうど宮古支庁にいた上地源七君が出張か何かでその日多良間に来て話したらしく、とにかく上地君たちが三日めにもたらし、仲松君からぼくは聞いたわけです。「終戦」と聞いたときは日本が勝つたと思いました。しばらくしてから敗戦とわかつてがつかりしたものでした。

しろ土地はやせているということだし、ちょっとでも干ばつがくるともう駄目なんだな。だからどこの家でもふだんから芋カスをつくつたり切干しをしたり、家ごとに庭にアダン葉ムシロを広げてやっている。切干しなんかおいしいものではない。そのままではとても食べられない。しかしソテツを食べるよりはまだまだしからね。栗を買いに出たり、食糧の買い出しに相当歩いた。それでも村でたつた一人の医者だから、ほかの一般の村民よりはいい方だったんじゃないかと思います。

空襲があんまり激しいものだから、少しでも広い所がいいだらうと、家族は昭和二十年の三月に入れかわるようにして平良へやりました。それからは小使いさんと二人きりで、夜は一人で寝るのだから、いつ敵が上陸してくるかわからないので、枕元にモヒを用意して寝ました。量を多くすれば眠るが如く死ねるので、敵の手にかかるよりは自分で死のうと思っていました。おそらく一人でも敵が上陸したと聞いたら私は真先に死んでいただろうと今でも思っています。

連城御嶽の診療所の裏山にのぼつて水平線をみると、夜中でも古の方の空が真っ赤にみえる。たぶん平良のまちが空襲で燃えているんだなと思うと……。家内は平良に行つて間もなく三番目の子を防空壕で生んだらしいんだが、空襲で避難するときあわてていたのか逆さに抱いて死なしてしまいました。それからさらに添道に疎開しましたが、どちらにいても同じだということで、六月にはまた多良間に帰つてきました。自分一人ならば死のうとどうしようとかまわないが、妻や子に戦争の被害がおよんでくるとなると、勝つても負けて

物資徵發に宮古から来た将校のなかには、日本は誘導作戦をして本土決戦をするんだ、だんだん敵をおびきよせて本土の水うちぎわでやつづけるんだ、あるいは「満洲」まで引揚げても「満洲」に上陸させてやつづけるんだと言つていました。それに日本もちよいちよい戦果をあげていることも聞かされているし、こんなに空襲でやられていても、終戦とだけ聞けば日本が勝つたんだと思うのは當時としては自然じゃなかつたですか。案外、アメリカは国内がもうかつたんだなあと思つたりしたものです。

日本が負けたということではなくとにかくがつかりしました。そのあとに来たのは、われわれは大丈夫だらうかといふことでした。何しろ軍は、「日本が戦争に負けたら日本人の男はすべて去勢して、日本人の種子は抹殺するんだ、生き残つてそんなめにあうより、死を覚悟してやれ!」。戦意昂揚のためかもしれないが、こんなことを言つていたのだから。

## 補 遺

### 一、袖山部落考

砂川明芳

のあるソデ山丘陵の南側に、一つの集落がありました。

この集落を、人々は袖山部落と呼んでいました。今は人家はひとつもなく、そまつな石積みや瓦のかけらなどに、わずかに当時を感じることができます。

この集落の消長を、当時袖山部落に住んでいた粟国定吉（大正五年生）、同ヒデ（大正六年生）夫妻と、安元弘（大正九年生）、同キヨ（大正七年生）夫妻、それに夫人がその部落に住んでいた村山豊さん（六七歳）の話を中心に、当時の町会議員長崎富一さん（七歳）の話や新聞記事を加えて、記録にとどめておきましょう。

#### 立ち退き命令下る

昭和十八年の九月当時、現在の宮古飛行場一帯には、三つの部落があり、平和な農業を営んでおりました。西の方から七原（ナナバリ）、屋原（ヤーバリ）、クイズの三つの部落がそれで、百数十家族が住んでいました。この地に海軍飛行場が建設されることになり、先ず、主滑走路に当る七原、屋原に立ち退き命令が出されました。

部落の人々は、不満に思いました。しかし、命令が下った以上、それに口出しすることが、何をもたらすかを知っていましたので、「ひのちあつての財産だ。」と、自分らにいいきかせてあきらめました。

地元出身の町議会議員（池村香一、本村真津、長崎富一の三人）は、平良町当局に相談して、平良町有地を無償で払い下げてもらうことにしました。

#### もらえなかつた時代

人々は代書を頼み、手続きをし、地代をもらいました。しかし、その半分は義務賃金を強制され凍結されました。

粟国さんは、土地代を一銭ももらっていないケースです。定吉さんの父が、「戦争が終れば、売つてさえなければいいかはとりかえせるんだ。」という考え方を示しましたが、実は、土地が先代名義になつていて、移転登記のわざわしさがあったので、手続きしないままに収用されました。あとになつて、金につまつて土地代をもうらう気になつたときは、空襲がはげしくなつており、手続きは不可能になつていきました。

立ち退きの日がやつてきました。

建物をくずして馬車で運びます。家財道具、畑のいもなども運びます。

だが間に合いません。多くの人力が投入されてこわしにかかります。一馬車分つんで、ついて帰ると、残りが低地に投げこまれて、うめ立てられるというあります。

あまりのひどい仕うちに定吉さんはいかりを発しました。作業にかりだされてきている婦人を叩いてしまつたのです。汗の結晶が、農民の生命の糧が、目の前で、つぶされているのをみて、がまんできなかつたのです。うしろで指図している権力の姿など心に浮ぶ余裕もありません。穂が出ようとしているサトウキビがつぶされていつた姿を今でも思い起すほどです。

四町歩の地主だった粟国さん一家は、ここで、一町歩の小作農になつてしましました。

実際には、昭和十六年六月の宮古郡会の記録で、平良町当局は、

屋原、七原部落民の更生策として、袖山地区三九反（反当三〇〇円）鏡原山地区五一反（反当三七〇円）で有償払下げを決定し官古支厅に「町有地基本財産処分申請」を出して許されている。屋原、七原の強制収用された土地は一六、一四二、六アール、八四一筆、二五五名の地主となつてゐる……。

立ち退きさきは、現在の宮古高校東側のフナコシ原、鏡原小学校東側の原野（現在の七原）、それに袖山の三つの地で、各戸に対し一反歩の供与がありました。

屋原部落の粟国さん方の親族は行き先地を決めるための協議をしました。本家の方からは、みんなまとまってフナコシの方に行こうじゃないか、という提案がありました。フナコシは、船底井という井戸に近く、水の便もあるし、町に接しているという利便があります。粟国定吉さんの家族は、之に応じませんでした。

粟国さんたちは、袖山に行く組に入りました。沖縄製糖株式会社の兼島農場に一町歩の小作地を借りる相談ができるので、そこに少しでも近い袖山をえらびました。兼島農場は、袖山から三キロほどの処にあります。

働き手の豈さんは徴用で留守であつた村山さんは、立ち退きによって三町歩もの耕地を失います。所有地の原野が袖山にあるということから、袖山組に入りました。

人々は、「ナナバリヤナナツンバリ、ヤーバリヤヤーツンバリ」（七原部落は七つに割れ、屋原部落は八つに割れ）と、部落離散の悲哀を表現しました。

#### 村山夫人たちは、原野の開墾にとりかかりました。

#### ブタは逃げた

昭和十九年の夏になると、満洲から陸軍部隊がやってきて、島は軍隊でうずまりました。十月からは空襲のはじまりです。

昭和二十年になると、連日のように米軍機がやってきました。

袖山に一応落着いた人々は、丘を越えて、四、五百メートルもある底原部落の井戸水をくみに通いました。空襲がはげしくなりますと、終日、自然洞に避難するようになりました。

馬や牛がちょうど発されていきます。定吉さんは、軍に徴用され、ちょうど発された自分の馬をひいて軍の加勢をさせられました。そのうちに、空襲で弾丸に当り、馬は戦死しました。

袖山の近くにも、陸軍や海軍の陣地がいくつもできました。軍からは、しばしば使役の命令が出されました。

玄米を五俵もつてきて、ついて納めよ、というのもありました。うすに入れ、水を加えてつくのです。袖山の人たちは白い米にひきつけられました。水を入れると、ふくれ上る米をみて、何割かをかすめると相談をしました。どの家も同じ割り合いでとれば、感付かれることはないと考え、みんなでそうしました。つき合としてとるのだ、と自分らにいいきかせて、とりました。サツマイモを常食としている人々の食せんは、白い米でにぎわいました。

牛や馬ばかりではなく、豚もよう発されることになります。陸軍のコミヤ隊がやってきて、これこれの豚は軍のものにするから、運動させずに養なつておけという命令がされました。

栗国さんの父とその友人は、はらにすえかねて、とうとう豚の頭を屠殺して、ごちそうにしました。そして、豚一頭逃亡の旨を軍に届け出たのです。

早速、呼び出しがかかつてきました。定吉さんも父につきそつてコミヤ隊に出頭しました。一人の軍曹がすごいけんまくでどなります。「逃げた筈はない。殺して食べたらう」と、せめだてます。三

人のほおに猛烈なビンタうちがとびました。

年とった二人は、ひるみません。「誰でも自分のいのちは惜しいもの。空襲のさなかにも豚を番しておれとは理不尽じゃないか」と抗議をくりかえします。根だけしたのか無罪放免となりました。

空襲が一層はげしくなり、上陸のおそれが増してくると、軍は食糧を大事にしました。それを見つけた二人の壮者たちは、道路によびとめ、許してはおかぬと責めたてました。軍曹がやつた分だけビンタをはね、軍曹をわびさせました。

五月には、栗国さんは郷土部隊に召集され、増原の当間隊に配属されました。もみがらまじりの玄米のめしは、腹をみただけはあてがわれません。サツマイモの葉や、アキノゲシの葉がなげこまれたおつゆで、はらをみました。

老人や女、子どもは、はげしい空襲で、昼は、防空壕にこもりつきります。海軍飛行場の主滑走路の延長線上二百メートルそこそこの距離にある袖山の里では、どうにもなりません。夕方家にかえつてみると、あたりに、いくつも大きな爆弾の穴があけられています。

(「オサムン」—掘り)というのをやりました。『自分の『煙』に行って、「軍』の掘りとったあの土の中から、小さな残りものである草のイモをとつてくるというあわれな仕儀です。

小さな芋の長い角(ツヌ、両端)をぎりります。そのまま丸煮(カーニーーン、皮煮イモ)にすると、とても食べたものではありません。それで、たいたあとで、つぶして、うすでつき、もち状になります。イモノリです。

とてもひもじいのですから、つぶさぬうちから、なべに手を入れて子どもたちは食べにかかります。男たちもそうするみじめさに、主婦たちは泣きました。昼飯はこれで何とかやつたが、夕飯はどうしよう。みんなの頭の中は食事のことしかないという状態でした。そういう生活が続いているある晩、安元さんのうちに、戦争中面倒をみてやつた一人の海軍兵がやってきました。アママガヤーといふ自然洞に手を入れて作った海軍の壕の兵隊です。

「あんたたちに元気があるなら」と兵隊はいました。「今晚、壕の中の米俵をぬすむがよい。」といいました。自分が歩哨に立つことになつているからだとのことです。

安元さんは、家々をふれ歩いて、里の人々を集めました。異議をはさむものはおる筈もありません。ドシャブリの雨の中を、心をはづませて壕に向つて進んでいました。

いつもは入り口に立つて歩哨の姿はありません。中に入りました。ところが大変です。通路がいく筋にも分かれしていて、迷路のようです。暗い壕の中を手分けして探すのですが、肝心な米俵がみつかりません。

五月のある日、一軒に焼夷弾がおちてしましました。軍隊が出動して消火につとめたようです。しかし、何しろ水のない処です。たちまちにして、四十戸のうちの十戸が全焼してしまいました。袖山さんのうちが焼けたのは終戦直後で、その日の被害は一軒だけでした。

#### 雨の中の集団

戦争はすみました。袖山の人々の中からは、死者は一人しかいませんでした。一人はジフテリア様の病気にかかり、医者にも診てもうえずに死んだ子どもでした。もう一人は、機銃弾の犠牲になつた老婆でした。シラミになってしまった。その畠地を、「軍」は「自活」と称して、不當にもとり上げたのです。

とり上げた土地のイモをぱりとつて食い、自分らでイモを植えています。「民」は、食うものを失つたことになります。背に腹はかえられません。夜になると、どろぼうになります。自分の『煙』について「軍」のイモをぬすむというどろぼうです。奇妙なことです。「軍」は小作料をはらうわけではないですから、人々は、ぬすんだ分が小作料だと思つています。だが、それは、暗がりの中でしか行なわれません。

ぬすみもうまくいかなくなります。仕方がないので、草のイモ

むなし、その場を離れました。  
雨はつめたく、はげしく、一層ふりつのりました。

#### 白い粉

三月頃には、軍はひきあげていきました。  
無償だといつてもらつた筈の払い下げの一反歩も、わずかではあったが、有償だと、町の議会は決めました。徴用にあつて死んだ馬のちょう発料も、反故にされてしましました。借りた小作地は、軍に用立てされ、はだかにされてもどつてきました。

朝のイモがゆをすすつた栗国さんは、父と三人つれだつて、借りた馬車にのつて八キロばかり離れた新里までいきました。立ち退きのとき家を建ててもらつた大工の家をつてにイモ買いに出かけたのです。もてる者はいいました。買いたければ、掘つて買うがよい、と。

掘りとつてあるイモを売る家はいくら探しもありません。三人は仕方なく、せつせと掘りました。やつとのことで、麻袋の二俵分位掘つて帰つたら、もう夜の十時にはなつていました。その間、ひとつ食つともなかつたのです。体力は極度に衰弱していたようです。

そうしたある日、アメリカの飛行機が、何やら白い煙を出しながら低空をとんでいました。白い煙は、白い粉で、草木の葉の表が白く色どられました。

その時からです。袖山の里がマラリアの生き地獄になったのは、戦争中、島の日本軍は、マラリア病のために相当いためつけられ

ました。戦前から、宮古島の北東部など、第三紀層の露出している粘土質の土壤のある地帯は、マラリア病地帯でしたが、そこに駐屯した部隊は、爆弾よりも、この病気のために戦死者を多く出し、戦力を消耗させていました。

しかし、袖山はマラリアのない地域にあるのです。あの時まかれた白い粉は、D、D、Tであるといわれています。マラリア病の媒介をする蚊を撲滅するために、飛行機による薬剤散布をしたもののがあります。

「ようです」とかいたのは、栗園さんたちは、それをそうは信じるわけにはいかない、というからです。

マラリア有病地帯のやぶの中にひそんでいた蚊が、薬剤散布について逃げまどい、群をなして、袖山の人々を襲ったのではないか、と説をなす人もいます。その説が正しいとして、何故、袖山を、蚊の群がおそったのか、そういう疑問が生じてきます。

有病地帯で軍に働くかされた定吉さんは、そこでは、マラリアにかかるなかつたのに、と、そばくな疑惑があります。それを解消することはできません。

毎日のように、柩がかづがれました。葬列に加わった隣接のフナコシの人々の中に、ささやきが流れました。あしたはあのうちに不幸があるだろう。あさってはもうらのうちの人だと。そのささやきの通り、人々は死んでいきました。

そのうちに、これは四百年余り前、悲しい死をとげた与那国鬼虎の娘のおん靈のせいにちがいない、という「ただり説」が流布されました。

## 二、台湾疎開者引揚船栄丸遭難

戦火も一段ときびしく敗色濃くなつた昭和十九年七月、軍の作戦遂行の必要から老幼婦女子を九州と台湾へ疎開させる方針が出されました。宮古郡では支庁、町村役場はもとより国民学校もあげて疎開奨励のための懇談会を部落ごとにひらき説得をはじめた。こうして八

九月には多くの郡民が、敵潜水艦の襲撃におびえながら、異郷に旅立つた。しかし疎開先では食糧難に苦しみ、とくに台湾では栄養失調とマラリアで一家全滅という悲惨事がいくつも起きている。敗戦後幾十日をへてもなお引揚げのための行政措置はなされず、疎開者は自力で故郷に帰る手だてを講ぜねばならなかつた。

こうして栄丸遭難の惨事は惹起したのである。廢船に古い器材をよせあつめて仕立てられた栄丸がキールン港を出たのは昭和二十年十一月一日夜。百数十人の宮古行きの引揚者が乗込んでいた。船は一時間たらずでキールン沖の荒波にもまれて遭難。人びとはすべて暗黒の荒海のなかに放り出されてしまった。翌朝までに救助された人もいたが、遺体の収容はその後一週間もかかったといふ。

栄丸に乗船したのは一体何人だったのか?ある人は一二七人、あ

る人は一七二人、さらにある人は一八三人という。救助されたのは二三人、三二人とこれもまちまちである。思うににわか仕立てのボロ船に定員や乗船名簿などはなく、ただ、とにかく家に帰りたい一心でワッと押しよせた人びと、その危険なさまを眼のあたりにみて、一たんは乗船したがおりた家族も幾組かい、さらに入れかわり乗りこんだ人びともいたというのだから、乗船者を正確につかむ

マラリア禍は一層つのっています。そのうちに葬列に加わる人々が三味線をひいて踊つてゐた。といううわさは、袖山の人々をふるえあがらせました。このままでおれば、部落の人は根絶やしになつてしまふ。そう思いました。別の集落にうつつていつた親類の人たちも、袖山を棄てることをすすめるようになります。

九月に人々は、袖山部落を放棄しました。ちょうど追われて移りました。

ネコが三味線をひいて踊つてゐた。といううわさは、袖山の人々をふるえあがらせました。このままでおれば、部落の人は根絶やしになつてしまふ。そう思いました。別の集落にうつつていつた親類の人たちも、袖山を棄てることをすすめるようになります。

一戸平均二人は死者を出したろうと、人々は数えあげます。栗園さんの家族も三人、安元さんたちも三人失なつていました。

あとがき

米海軍が昭和二十年の十二月にアテブリン(マラリア特効薬)五〇万粒を贈るという新聞報道があるが、実際民需に供されたかどうかは不明である。

二十一作の七月には、西原、添道、大浦の平良市北部地帯に悪性マラリア蔓延し、たおれるもの続出という報道があった。

二十一年十月七日から七十四日間台湾にいつくるまでの間に、七十五人の西原部落民がマラリアで死んでいたという記録をしたと、仲間弘雅氏は語っている。

ことはむつかしい。さらに死んだ人の数を知るのもむつかしいようと思われる。百名以上が死んだー一致しているのはその点ばかりである。

(仲宗根将二)

### 栄丸遭難 1

下地村字上地 上 地 護 男 (十二歳)

#### 「琉球ワーリ」といじめられる

昭和十九年八月、非常に暑いときでした。輸送船三隻で船団をくんで台湾に疎開しました。一隻に百五十人でいどづつ乗つていましましたが、年よりはたつた一人男の人がいただけで、あとは高等科以下の子どもと女ばかりの疎開でした。僕の家族は母カマド(39)、兄繁(高等科一)、弟光雄(初等科三)、博子(3)それに子守りの譜久村シゲさん(14)みんなで五人でした。乗船して三日間は池間沖で碇泊、あさ八時ごろ船團をくんで出発しましたが、翌日の夕方は基隆に着き、さらに三時間ぐらい汽車にゆられて新竹州チュウレキ郡ヨーバイ町に落ちつきました。

寮に収容されたが、元々何かの倉庫に使つていたのを改造したもののらしく校舎のよう長い建物の真中に廊下があつて、部屋はそれぞれアプロックずつ向きあつて並んでいました。共同炊事場が別棟にあつて、各世帯ごとに七輪でパタパタさせながら食事の用意をしていました。食糧は宮古と同じように配給制でしたが、闇米を買っておきながらおもなお朝と昼はオカユ、晩だけが固い御飯でした。野